丸山遺跡

箕輪町土地開発公社による墓地造成工事に伴う

丸山遺跡の第3次緊急発掘調査報告書

1994年

長野県上伊那郡箕輪町土地開発公社

上伊那郡箕輪町教育委員会

丸山遺跡

箕輪町土地開発公社による墓地造成工事に伴う
丸山遺跡の第3次緊急発掘調査報告書

1994年
長野県上伊那郡箕輪町土地開発公社
上伊那郡箕輪町教育委員会

序

丸山遺跡は、箕輪町沢区、町立箕輪北小学校の西側に位置し、河岸段丘の上に所在する遺跡の一つであります。周辺は、西天竜用水路の開設によって水田地帯となりましたが、以前は、クヌギを中心とした雑木林が広がっておりました。地元ではこの一帯を「ドングリ山」と呼び、皆から非常に親しまれた場所でした。しかし、近年における人口増加も手伝って、住宅地としての変貌を遂げつつあります。ここはまた、多くの土器・黒曜石を採集できるところとして知られており、その多くは北小学校に大切に保存されています。

平成元年には、国道153号線・箕輪バイパスの建設工事に伴って本遺跡の第1次発掘調査が実施され、縄文時代、奈良・平安時代の住まいの跡から当時の生活を物語る土器や石器などが多数出土しました。そして今回は、町開発公社による墓地造成工事に先立ち、丸山遺跡の第3次調査を実施し、前回同様に非常に内容のある成果を納めることができました。結果につきましては、本書の中で詳細に記してありますので、広く活用していただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、本事業に対し多大なご理解とご協力をいただいた各関係諸機関並びに調査関係者の皆様方に、本書の刊行をもちまして心から感謝申し上げます。

例　言

1．本書は、長野県上伊那郡箕輪町中箕輪1098-1番地他に所在する丸山遺跡の第３次緊急発掘調査報告書である。

2．本発掘調査は、箕輪町教育委員会が行ったものである。平成５年８月20日から平成５年10月12日まで調査を実施し、平成６年３月まで整理作業及び報告書の執筆作業を行った。

3．本書を作成するにあたって、作業分担を以下の通り行った。

遺物の復元－福沢幸一

石器の石質鑑定－樋口彦雄

遺構図の整理・トレース－赤松　茂、根橋とし子、西出あゆみ

遺物の実測・トレース－根橋とし子、根橋由紀、西出あゆみ、宮脇陽子、百瀬千里

挿図作成－赤松　茂、根橋とし子、西出あゆみ

写真撮影・図版作成－赤松　茂

4．遺構図は、次の縮尺に統一した。

住居址－１：６０、土坑－１：４０

5．遺物実測図は、次の縮尺に統一した。

縄文土器実測図－１：４、土器拓影図－２：３、石器－２：３、１：３

6．土器実測図及び土器拓影図の断面は、粘土帯の接合状況の観察できるもののみ断面に表示した。

7．本書の執筆は、赤松　茂、宮脇陽子が行った。

8．本書の編集は、赤松　茂、根橋とし子、根橋由紀、西出あゆみ、樋口彦雄、福沢幸一、宮脇陽子、百瀬千里が行った。

9．出土遺物及び図版類は、全て箕輪町教育委員会が保管している。広く活用されたい。

本文目次

題　字　　団長　樋口彦雄

序　　教育長　堀口　泉

例　言

本文目次

挿図目次

表目次

図版目次

第Ⅰ章　発掘調査の経過……1

第1節　調査に至る経過……1

第2節　調査組織の編成……2

第3節　調査日誌……3

第Ⅱ章　遺跡の立地……5

第1節　自然環境……5

第2節　歴史環境……6

第Ⅲ章　調査の結果……8

第1節　調査方法と結果概要……8

第2節　土層堆積状況……10

第Ⅳ章　遺構と遺物……11

第1節　住居址……11

第2節　土　坑……23

第3節　遺構外出土遺物……25

第Ⅴ章　まとめ……27

挿図目次

第１図　位置図……1
第２図　周辺遺跡分布図……7
第３図　調査範囲図……8
第４図　全体図……9
第５図　土層図……10
第６図　８号住居址実測図……11
第７図　８号住居址出土土器実測図・石器実測図……12
第８図　23号住居址実測図……14
第９図　23号住居址出土土器実測図・土器拓影図・石器実測図……15
第10図　24号住居址実測図……17
第11図　24号住居址出土土器実測図・土器拓影図……18
第12図　24号住居址出土石器実測図……19
第13図　25号住居址実測図……21
第14図　25号住居址出土土器拓影図……22
第15図　土坑実測図……23
第16図　土坑出土土器・石器実測図……24
第17図　遺構外出土土器・石器実測図……25

表 目 次

第１表　周囲遺跡分布一覧表……6
第２表　８号住居址出土石器観察表……13
第３表　23号住居址出土石器観察表……16
第４表　24号住居址出土石器観察表……20
第５表　３号土坑出土石器観察表……24
第６表　遺構外出土石器観察表……26

図版目次

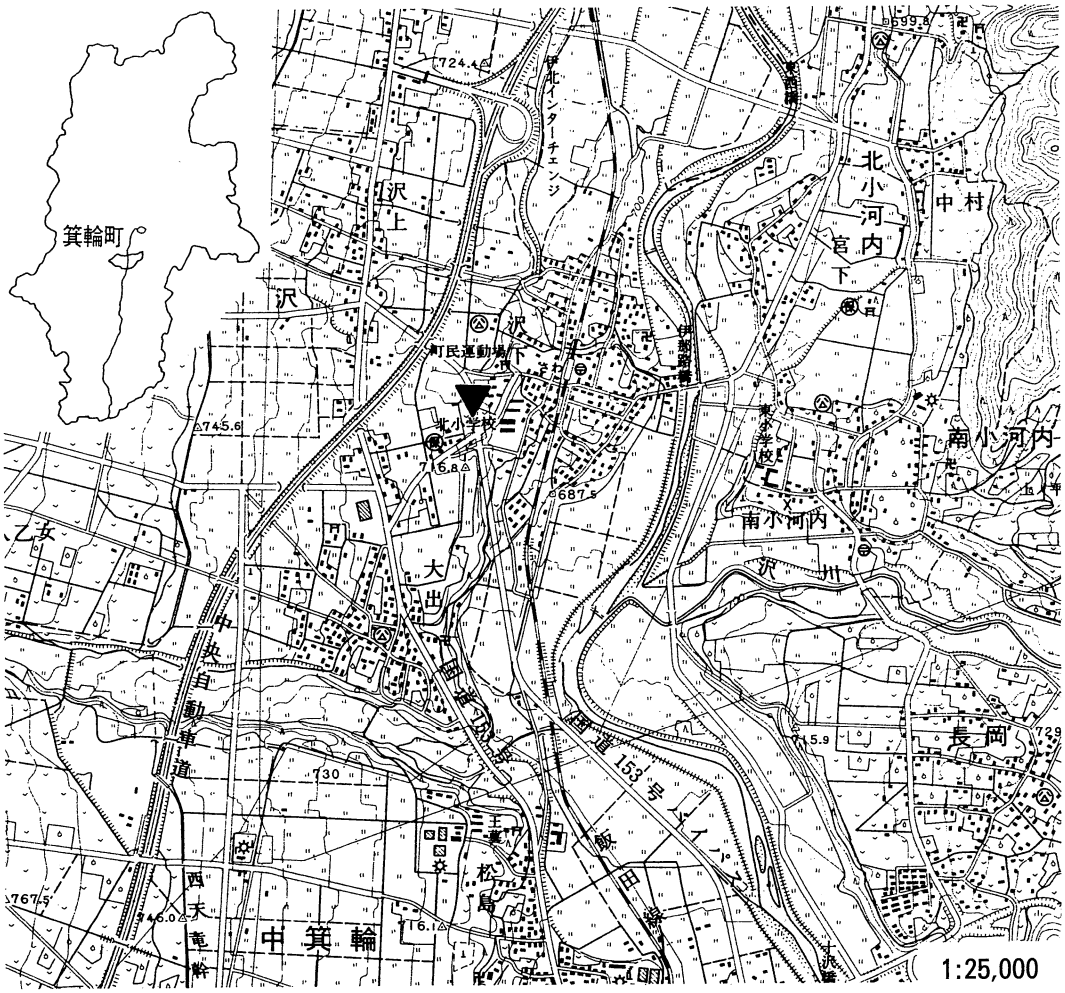
図版１　遺跡地遠景（東方より）、調査地近景（南西より）
図版２　調査地全景、土層断面
図版３　８号住居址、23号住居址
図版４　24号住居址、25号住居址
図版５　１号土坑、２号土坑、３号土坑
図版６　24号住居址出土土器、３号土坑出土土器、遺構外出土土器
図版７　出土石器１、出土石器２
図版８　出土石器３、出土石器４
図版９　出土石器５、出土石器６

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に至る経過

丸山遺跡は、箕輪町沢区のほぼ中央、箕輪北小学校の西側に位置する。地勢を見ると、東西ではかなり高低差があるが、南北については大出区から松島区への国道を隔てて南側はやや低く、北側は各地区によって若干の高低差が認められる緩やかな傾斜地が見られる。遺跡は、傾斜地の西端部に南北に連なる河岸段丘の末端部に立地する。。

町教育委員会は平成元年度に、国道153号線箕輪バイパス建設工事に伴って、丸山遺跡の第



第１図　位置図

1次調査と熊の上遺跡の発掘調査を実施し記録保存を行い、縄文時代中期中・後葉の集落址が確認され、多大な成果を収めている。そして、平成4年度中に道路用地の取得できたことによる第2次調査再開の合意を見るに至った。また、残地となる畑地の125㎡を町土地開発公社が買収し、墓地の造成を行うこととなり、公社と町教育委員会との間で協議が持たれ、発掘調査による記録保存を行うこととなった。翌平成5年7月、両機関の間で改めて発掘調査の委託契約が結ばれた。そして、町教育委員会が新たに調査団を結成し、同年8月20日から10月12日までを期間として本遺跡の第3次調査を実施した。調査終了後、直ちに整理作業を開始し、平成6年3月をもって報告書の刊行に至った。

尚、調査地点は、上伊那郡箕輪町大字中箕輪1,098番地の1他で、北緯35° 55′ 54″、東経137° 59′ 07″、標高713～715mに位置する。

第2節　調査組織の編成

調査主体・事務局

箕輪町教育委員会	教　育　長	堀口　　泉
	社会教育課長	大槻　丞司
	主　　幹	柴　登巳夫（箕輪町郷土博物館主任学芸員）
	副　主　幹	青木　　正（箕輪町郷土博物館事務職員）
	主　　査	赤松　　茂（箕輪町郷土博物館学芸員）
	臨時職員	酒井　峰子
	臨時職員	根橋とし子
	臨時職員	宮脇　陽子

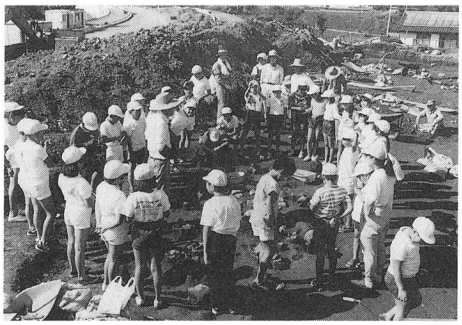
調査団

調査団長	樋口　彦雄
調査主任	赤松　　茂
調 査 員	福沢　幸一
調 査 員	根橋とし子
調 査 員	宮脇　陽子
調査団員	井上武雄、大槻泰人、岡　　章、岡　　正、春日義人、唐沢光國、倉田千明、小池久人、小嶋久雄、後籐主計、笹川正秋、野村金吉、伯耆原　正、堀　五百治、堀　美人、松田貫一、松田幸雄、水田重男、向山幸次郎、矢島祥亮、山口昭平、山田武志、根橋由紀、西出あゆみ、唐沢房恵、三浦幸子、百瀬千里、百瀬美晴

第３節　調査日誌

８月20日（金）　曇　　重機による表土剥ぎを行った。
８月23日（月）　晴　　作業道具の運搬を行った。
８月24日（火）　晴　　東側から西方へと遺構上面確認を行った。縄文土器片や石鏃が出土した。
８月25日（水）　晴　　上面確認を引き続き行った。また、サブトレンチＡ・Ｂを開けた。
８月26日（木）　曇　　上面確認を行った。縄文時代の住居址が１軒検出された。また、ベンチマークの移動を行った。
８月27日（金）　雨　　室内作業
８月30日（月）　晴　　上面確認を行った。
８月31日（火）　晴　　上面確認を行った。第１次調査時に確認された８号住居址を含め、住居址は４軒（８・23～25号住居址と命名）を検出した。
９月１日（水）　晴　　23・24号住居址にベルトを設定し、掘り下げを行った。24号住居址からは、石組み炉を検出した。
９月２日（木）　曇　　23･24号住居址の掘り下げを行い、ベルトの土層断面測量を行った。また、北壁の断面測量を行った。みのわ新聞・箕輪毎日新聞が取材に、桑沢町議が見学に来た。
９月３日（金）　雨　　室内作業
９月６日（月）　曇　　24号住居址の断面測量と各住居址の掘り下げを行った。箕輪北小学校長が視察に来た。
９月７～９日（火～木）　雨　　室内作業
９月10日（金）　曇　　各住居址の柱穴の半割りを行った。
９月13・14日（月・火）　雨　　室内作業
９月16日（木）　晴　　24号住居址の柱穴の掘削と23号住居址の写真撮影をした。また、箕輪北小学校の生徒が見学に来た。

9月17日（金）　曇　24号住居址の柱穴の断面測量と掘削を行った。



9月20日（月）　晴　23号住居址の平面測量と24号住居址の炉と柱穴の半割りと断面測量を行った。

9月21日（火）　曇　24号住居址の周溝の掘削を行った。教育長が視察に来た。

9月22日（水）　雨　室内作業

9月24日（金）　晴　24号住居址の炉の写真を撮った。また、2号土坑の掘削を行った。

9月27日（月）　晴　24号住居址の写真撮影をし、その後炉の平面測量を行った。

9月28日（火）　晴　24号住居址の平面測量を行った。

9月29日（水）　曇　24号住居址のエレベーションを取った。

9月30日（木）　雨　室内作業

10月1日（金）　晴　8号住居址の土器の平面測量を行った。

10月4日（月）　晴　1号土坑の掘削も行った。

10月5日（火）　曇　8号住居址の平面測量を行った。調査区全体の写真も撮った。

10月6日（水）　曇　24号住居址の炉の土器の取り上げを行った。

10月7日（木）　曇　24号住居址の炉の掘り方の平面測量と調査区の全体測量を行った。また、3号土坑の平面測量を行った。

10月8日（金）　雨　室内作業

10月11日（火）　晴　調査区北壁の壁削りを行い、断面測量を行った。午後、道具の片付けを行った。

10月12日（水）　曇　北壁断面の土層注記を行い、調査の全てを終了した。

第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　自然環境

箕輪町は、西は木曽山脈、東は赤石山脈に囲まれた伊那盆地の北方にあり、諏訪湖を源とする天竜川が、町のほぼ中央を東西に二分するように南流している。天竜川西岸に発達した広大な扇状地は、木曽山系の山々から天竜川に流れ込む中小河川によって形成された複合扇状地である。北から、北の沢川、桑沢川、深沢川、帯無川、大泉川、小沢川と続き、南ほど流路が長くなっている。それは、西側の山々が北から南にかけて高さを増しているためで、その流路に比例して山麓に形成される扇状地の規模も大きくなっている。扇状地における地質構造は、ローム層とその下の砂岩・粘板岩を主とする円礫層・砂の層で構成されている。天竜川はその末端部を南流し、流路に沿って河岸段丘を作り上げている。段丘の突端部は、天竜川や中小河川の氾濫による水害を受けにくい東側に面する緩やかな傾斜地である。段丘下には、扇頂部や扇央部より地下に浸透した地下水が伏流水となって天竜礫層と沖積層の境に湧き出る湧水が多く、扇状地を流れる小河川の水利と合わせ、豊かな水源に恵まれている。また、段丘崖下には、天竜川による広大な氾濫原を見ることができる。

丸山遺跡は、この河岸段丘の突端部にそって帯状に連なる遺跡群の一つであり、上記のとおり恵まれた自然環境の中に存在しているといえよう。

上空より遺跡地を望む

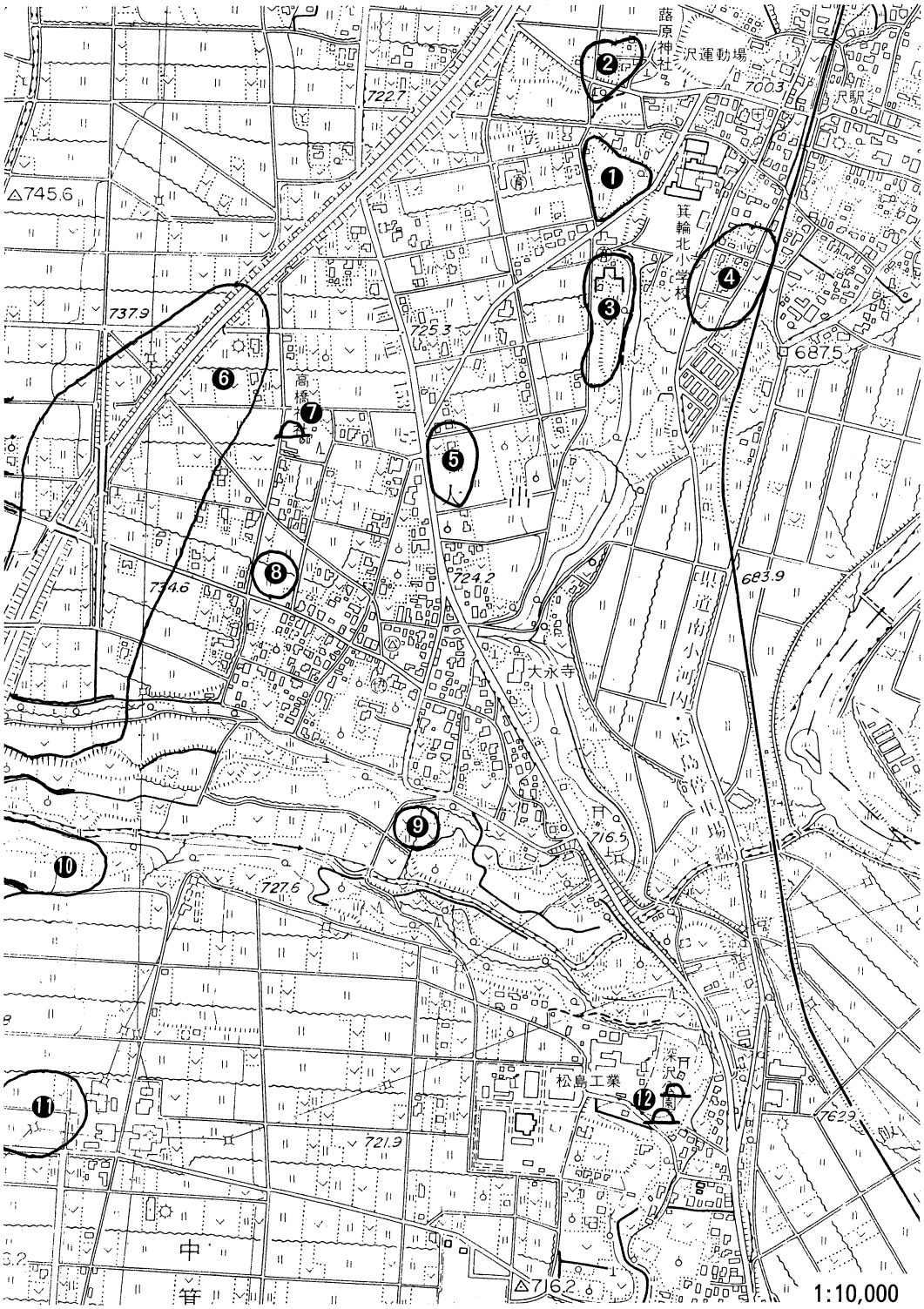
第2節　歴史環境

箕輪町は、天竜川を挟んで典型的な河岸段丘と扇状地が形成された地形で、湧水にも恵まれ先史より人が居住し易い好的な所といえる。町内にはそんな原始・古代人たちが残した足跡ともいうべき多くの遺跡が散在し、現在のところ包蔵地176箇所、古墳24基が確認され、上伊那郡内においても屈指の遺跡地帯として知られている。その多くは河岸段丘上及び扇状地に立地しており、天竜川右岸の遺跡の分布状況は、河岸段丘の突端部にみられる遺跡（1～8）と、深沢川や桑沢川などの天竜川に注ぐ小河川の両岸に存在する遺跡の2つに大別することができる。本年までに行なわれた発掘例を中心に前者について概観してみると、縄文・弥生・平安の各時代の集落址の一端を探ることができた。また、段丘崖下には古代水田址である広大な箕輪遺跡が広がる。

今後、これらの遺跡を保護していく上でも、この一帯における開発には、充分な注意を図っていく必要があるといえる。

第1表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	地籍	立地	時代						備考
				旧石	縄文	弥生	古墳	奈・平	中・近	
1	丸山	沢	段丘		○					平成元年、第1次発掘調査実施
2	蕗原神社上	沢	段丘		○					
3	古城	沢	段丘		○			○	○	平成元年、熊野上遺跡として発掘調査実施
4	熊野	沢	段丘		○					
5	稲荷山	大出	段丘					○		
6	中道	大出	扇央		○		○	○	○	昭和48年、県教委にて発掘調査実施。昭和63年発掘調査実施。
7	大天塚古墳	大出	扇央				○			
8	かんぜん	大出	扇央					○		
9	大出	大出	扇央		○			○		
10	堂地	松島	扇央		○	○		○		昭和48年、県教委にて発掘調査実施。昭和63年発掘調査実施。
11	大道上	松島	扇央					○		
12	松島王墓古墳	松島	段丘				○			昭和40年、長野県史跡指定



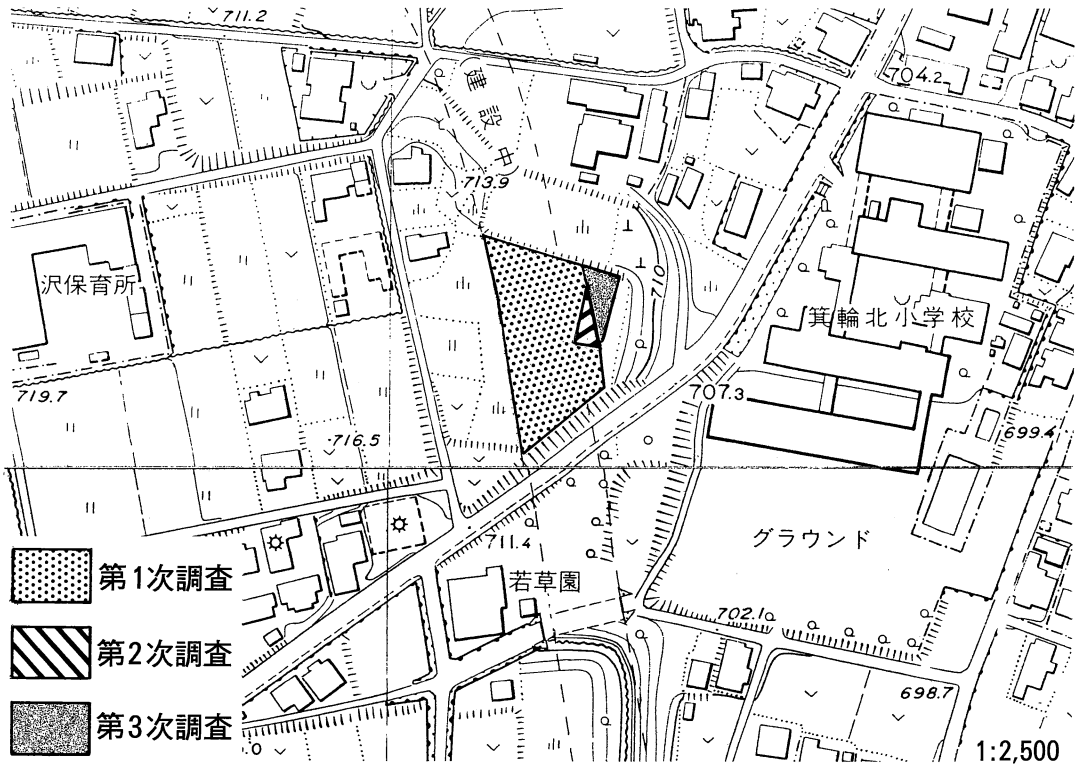
第2図　周辺遺跡分布図（昭和52年現在）

第Ⅲ章　調査の結果

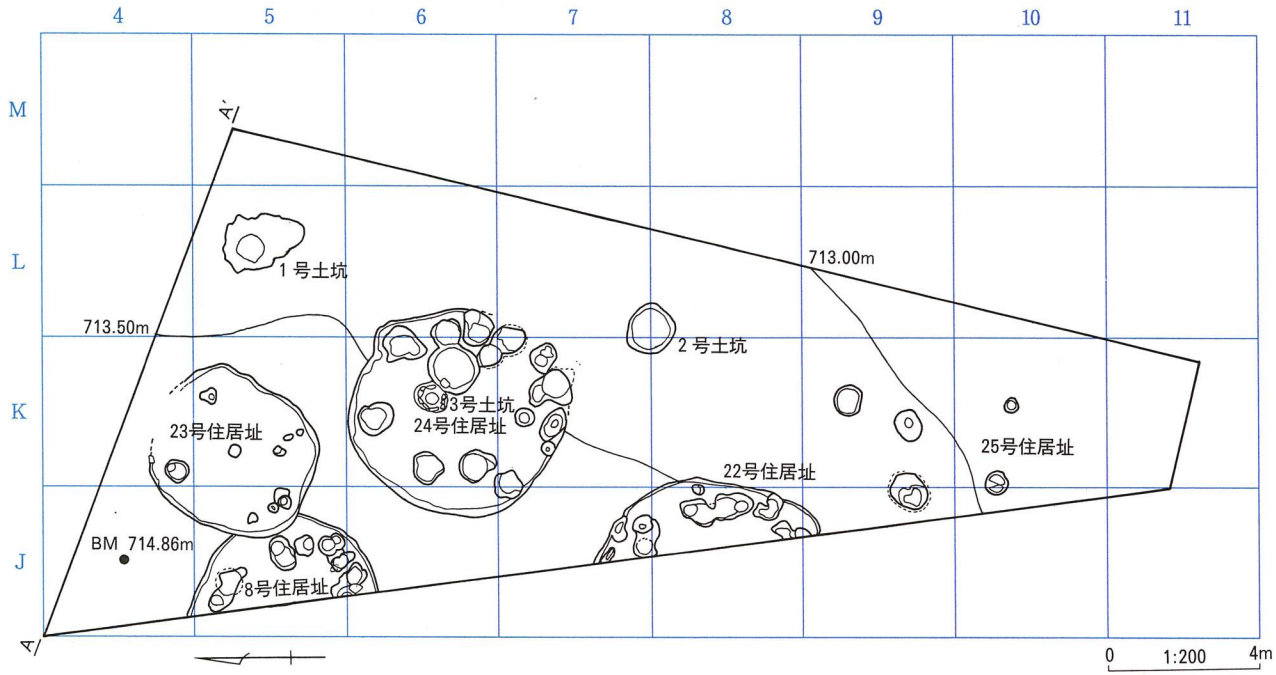
第１節　調査方法と結果概要

今回の調査は、前回行った第１次調査箇所に隣接しかつ遺跡の東端部に位置することから、調査面積およそ125㎡の全域を対象とし、調査を実施した。第１次調査では畑地として土地利用されていた現地が、かつて水田であったことが確認できており、全体的に削平され、また部分的に著しい撹乱を受けている可能性を予測していた。しかし、地下遺構の保存状況は部分的な撹乱や遺構上部の削平など、破壊は受けているものの、比較的明瞭に遺構の確認が行えた前回の例に習い、地形の傾斜を考慮して大型重機によるトレンチ掘り、そして表土の除去作業を調査の手始めとした。尚、調査箇所の西側に隣接する第２次調査箇所と、一部調査を並行して実施した。これはあくまでも作業進行上、効率的かつ、より正確な遺構の検出や記録が行えることを目的としたためである。

作業は表土除去の後、手作業により遺構の上面確認、遺構内の掘削、平面及び断面の測量・写真撮影等の記録の順で行い、検出した遺構は前回の遺構番号に継続して呼称した。また、



第３図　調査範囲図


4
5
6
7
8
9
10
11
M
L
K
J
A
A'
1 号土坑
713.50m
713.00m
2 号土坑
23号住居址
23号土坑
24号住居址
22号住居址
25号住居址
BM 714.86m
8号住居址
0
1:200
4m

第 4 図　全体図

グリッドも調査中に任意に設定したが、終了後整理作業時において第１次調査グリッドに修正している。標高は、調査地の北西部にあるベンチマーク（714.86m）を使用した。検出遺構の概要は次のとおりである。

・竪穴式住居址４軒（縄文時代）

・土坑３基（縄文時代）

第２節　土層堆積状況

天竜川西岸の扇状地上における地質構造は、耕作土等黒褐色腐食土層→テフラ層（ローム層）→砂岩・粘板岩を主とする砂礫層という堆積状況が普遍的にみられ、遺構の構築はテフラ層にまで及ぶものが多い。

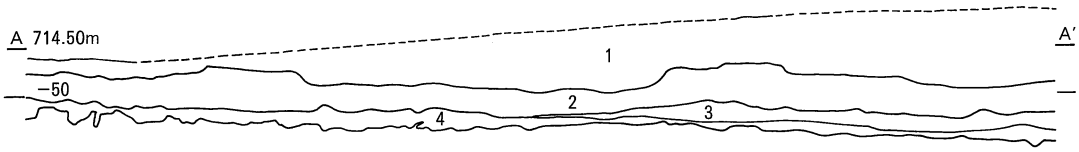
Ⅰ層－黒褐色土（10YR2／3）耕作土。粘性弱、締まり強。

Ⅱ層－鈍い赤褐色土（2.5YR5／4）撹乱層。３～５㎝大の礫を５％含む。粘性弱、締まり強。

Ⅲ層－黒褐色土（10YR2／2）水田土。本層下部に酸化鉄の沈澱が確認される。粘性中、締まり強。

Ⅳ層－暗褐色土（10YR3／3）遺構確認層。粘性中、締まり強

Ⅴ層－黄褐色土層（10YR5／6）テフラ層。粘性中、締まり強。



第５図　土層図

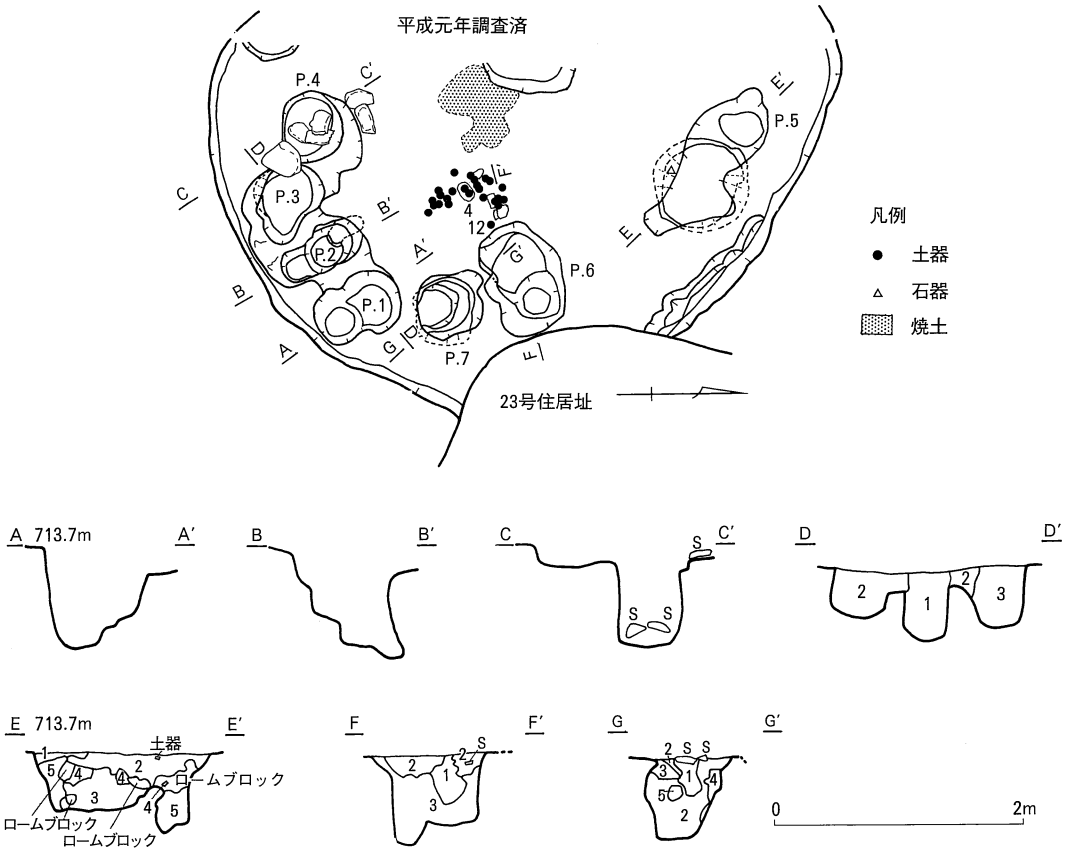
第Ⅳ章　遺構と遺物

第１節　住居址

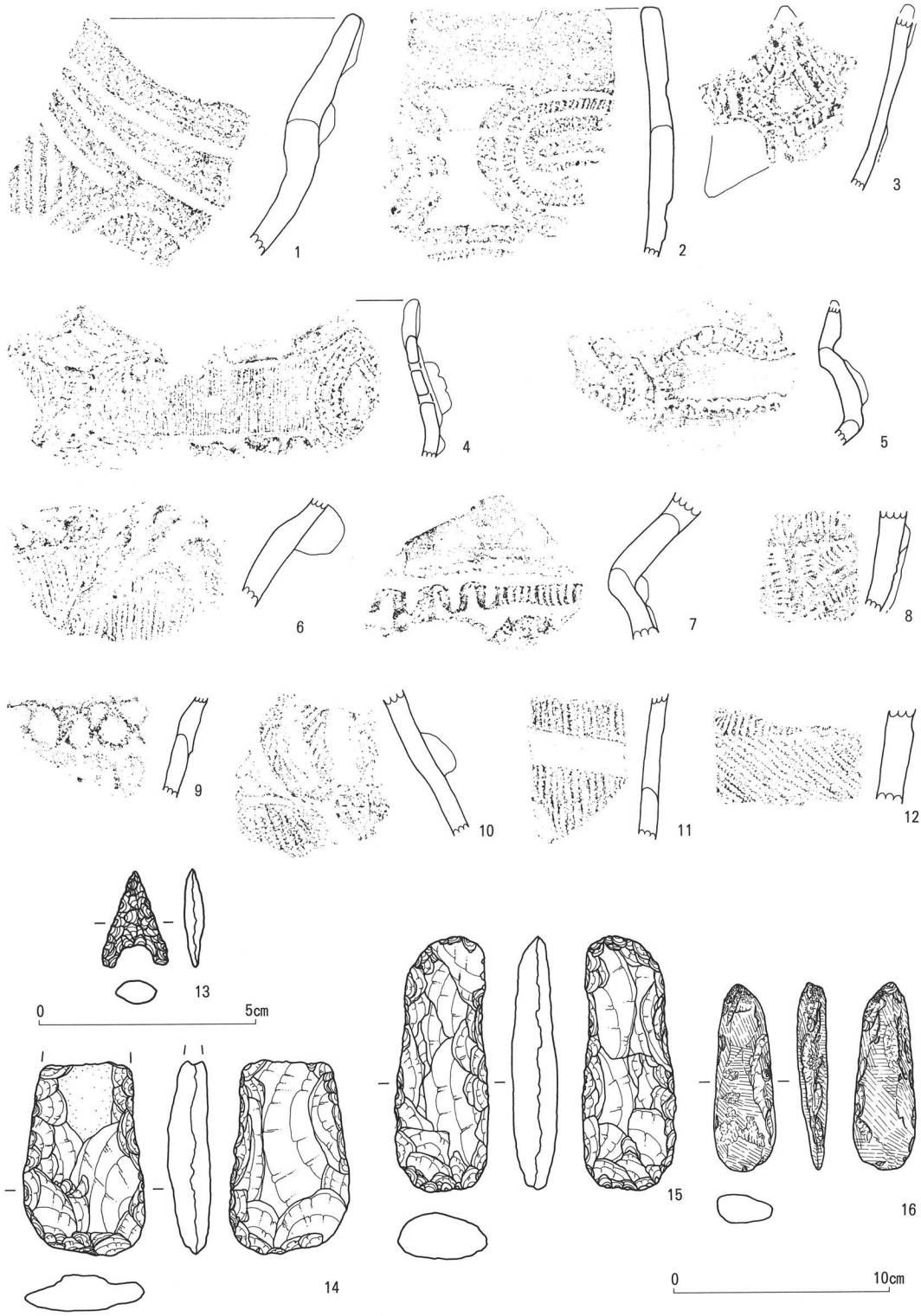
１，８号住居址

遺構（第６図）　調査区の北西部、Ｊ－５・６グリッドに位置する。住居址は、西側が第１次調査で、調査確認されているため、約５割の検出であった。そのため、プラン全体の規模・形状は明確ではないが、直径約５ｍの円形プランを呈すると思われる。また、隣接する23号住居址に切られている。主軸は、炉の位置とその周辺の床の範囲から推測すると、Ｎ－69°－Ｗを示す。壁高はおおよそ20㎝を測り、東側に一部壁溝が残存しているが、他からはその痕跡は認められなかった。床の状態は、比較的堅い床が全体的にみられた。

ピットは７穴検出され、形状・規模・深さ・断面にみられる掘り込み状況から柱穴と土坑とに種別できる。柱穴になるものは、第１次調査の結果からＰ２・５・６の３穴が想定される。



第６図　８号住居址実測図



第7図　8号住居址出土土器実測図・石器実測図

ピットの法量は次のとおりである（凡例－長軸×短軸×深さ）。Ｐ１－70×50×75cm、Ｐ２－(45)×30×55cm、Ｐ３－(70)×50×40cm、Ｐ４－80×(55)×70cm、Ｐ５－(55)×50×60cm、Ｐ６－60×(45)×70cm、Ｐ７－60×55×65cm。

炉は、第１次調査の跡が検出され、その周辺には焼土が確認できた。

遺物（第７図）　土器（１～12）及び石器（13～16）が出土している。遺物は、Ｐ６の西側脇の床直上ないし床上15cm以内の高さから集中した出土の仕方をしている。土器は個体にはならず、全て破片の状態で出土している。１、３～５は、おそらく４単位からなる波状口縁の一部でキャリパー型を呈する。２は、円筒形を呈する口縁部の一部である。６～12は何れも頸部あるいは胴部の破片である。文様は、連続する爪形文と沈線・隆帯文を基本としている。２・４は、楕円横帯文で文様区画し、４はその間を縦位に沈線が入る。また、焼成後故意に５㎜大の小穴を開けている。補修孔と思われる。７は、第１次調査の際に出土した顔面把手付き土器の頸部片である。また、10～12は、縦位・斜位にＬＲ縄文が付けられ、11はその後横位にすり消し沈線が入る。

石器は、石鏃（13）、打製石斧（14・15）、磨製石斧（16）が出土している。

本住居址の時期は、第１次調査の結果と出土土器の特徴より、縄文時代中期中葉に位置づけられよう。

第２表　８号住居址出土石器観察表

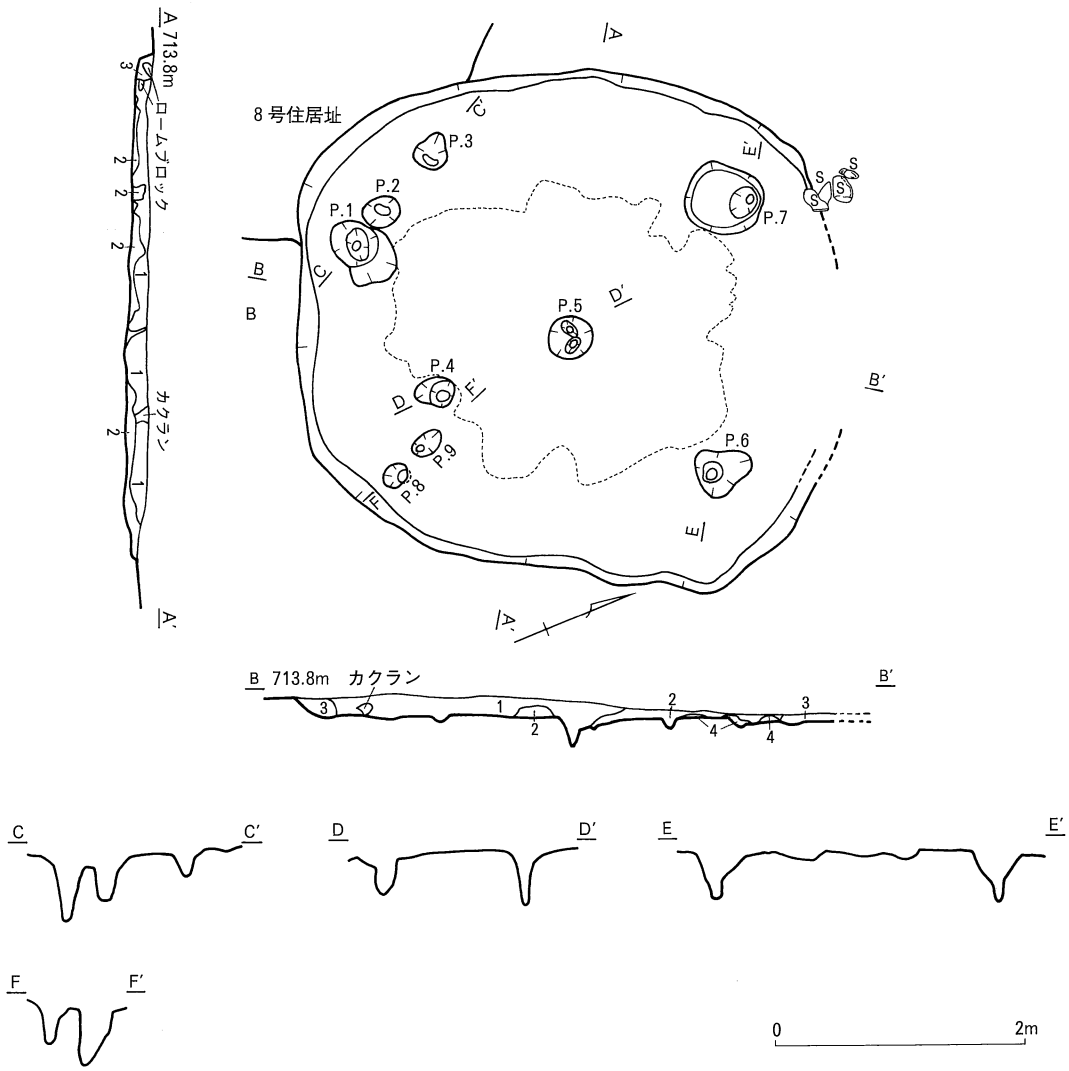
（法量欄：上段＝長さ、中段＝最大幅、下段＝厚さ）

番号	分　類	石質	法量	重さ	諸　特　徴	備　考
			(cm)	(g)		
13	石　鏃	黒曜石	2.2 1.5 0.5	0.7	・凹基無茎石鏃。 ・両面調整により、丁寧な作出がなされ断面はレンズ状を呈する。	
14	打製石斧	粘板岩	8.9 5.5 1.9	115.0	・撥形か? ・表面に自然面を有する。両側縁部共、細かい調整がなされ、基部には使用による後退が認められる。	上部欠損
15	打製石斧	粘板岩	11.7 4.4 2.1	137.0	・短冊型 ・基部、頂部共、刃部として使用されている。 ・基部は激しい使用による、後退が認められる。	
16	磨製石斧	頁　岩	8.6 2.4 0.9	43.0	・全体的に磨痕が認められる。 ・刃部は、研磨による両面調整により、丁寧に作出されている。 ・頂部には敲打による磨滅と剥離が認められる。	

2，23号住居址

遺構（第８図）　調査区の北側、Ｊ－５・Ｋ－５グリッドに位置する。住居址は西側に隣接する８号住居址を切り、また北側は掘削以前に既に上部の削平と撹乱を受けており、プランは明確ではないが、直径４ｍ前後の円形プランを呈する。壁高は、15㎝を測る。床は、住居址中央部のピットの周辺が堅く叩き締められているが、壁に近いピットの周辺部は比較的軟弱であった。

覆土は４分層された。１層は、ローム粒子・炭化物を１％以下含む黒褐色土（10YR2／3）。２層はローム粒子・ブッロクを40％含む暗褐色土（10YR3／3）。３層は炭化物を１％以下含む鈍い黄褐色土（10YR4／3）。４層は鈍い黄褐色土（10YR5／4）。

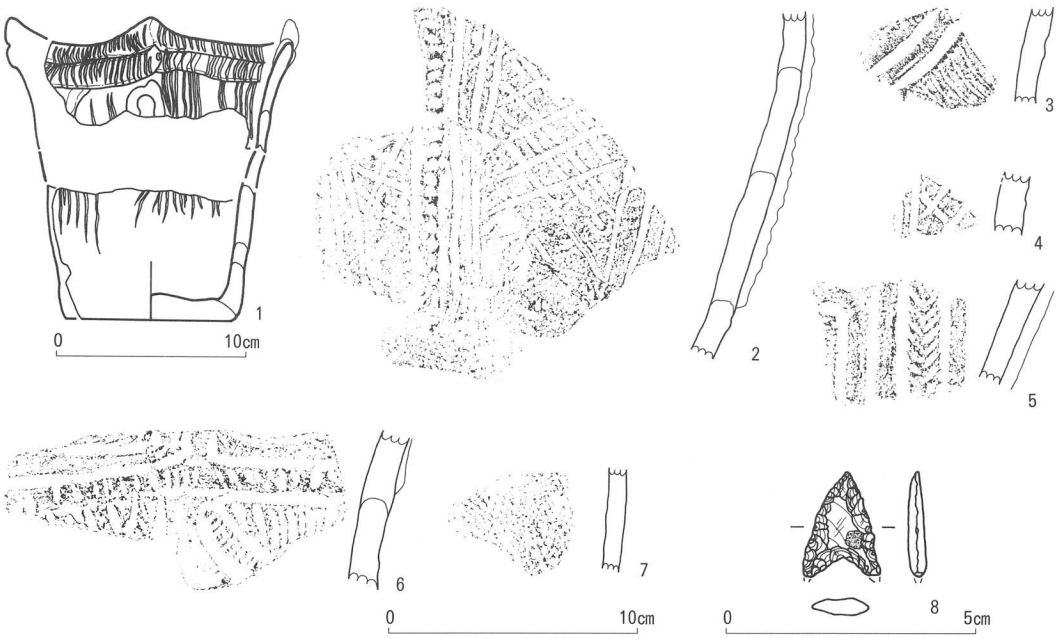


第８図　23号住居址実測図

ピットは９穴検出された。ピットの法量は次のとおりである。Ｐ１－60×35×50㎝、Ｐ２－30×25×35㎝、Ｐ３－30×25×15㎝、Ｐ４－30×25×30㎝、Ｐ５－35×35×45㎝、Ｐ６－45×40×45㎝、Ｐ７－65×55×45㎝、Ｐ８－20×20×30㎝、Ｐ９－25×15×45㎝。住居址のほぼ中央にＰ５が検出されたが、掘り込みは浅く、また焼土の検出もなく、炉として使用されていた可能性は低いと思われる。残りの８穴についていも、形状・規模から何れのピットも柱穴となり得るため、断定することができない。

遺物（第９図）　土器（１～７）と石器（８）が出土している。土器の出土量は少なく、また点在して出土した。１は中型の深鉢で、４単位からなる波状口縁を持ち、緩やかに外開して立ち上がる。胴部は欠損する。文様は、口縁部に連続する爪形文が横位に付けられる。また、頸部以下には縦位に半截竹管状工具による平行沈線が施される。２～６は何れも破片で、２は底部で、縦位に隆帯を貼付し、器面は格子目状に沈線を施している。４は２と同一。３は２タイプの沈線を基本とし、５は沈線と刻み隆帯を貼付している。６は、櫛形文が付けられてる。出土土器の時期は、形態・文様から縄文時代中期中葉も後半に位置づけられよう。

石器は、石鏃（８）１点のみが出土している。凹基無茎石鏃で両脚部の先端が欠損するものの、ほぼ完全な形で出土している。石質は、黒曜石。



第９図　23号住居址出土土器拓影図・石器実測図

第３表　23号住居址出土石器観察表

（法量欄：上段＝長さ、中段＝最大幅、下段＝厚さ）

番号	分　類	石質	法量	重さ	諸　特　徴	備　考
8	石　鏃	黒曜石	(cm) (2.1) 1.6 0.3	(g) 0.6	・凹基無茎石鏃。 ・両面共、周縁部を調することにより、中央に未調整部分を残す。断面はレンズ状を呈している。 ・砂粒の混入が見られる。	両脚先端部欠損

３，24号住居址

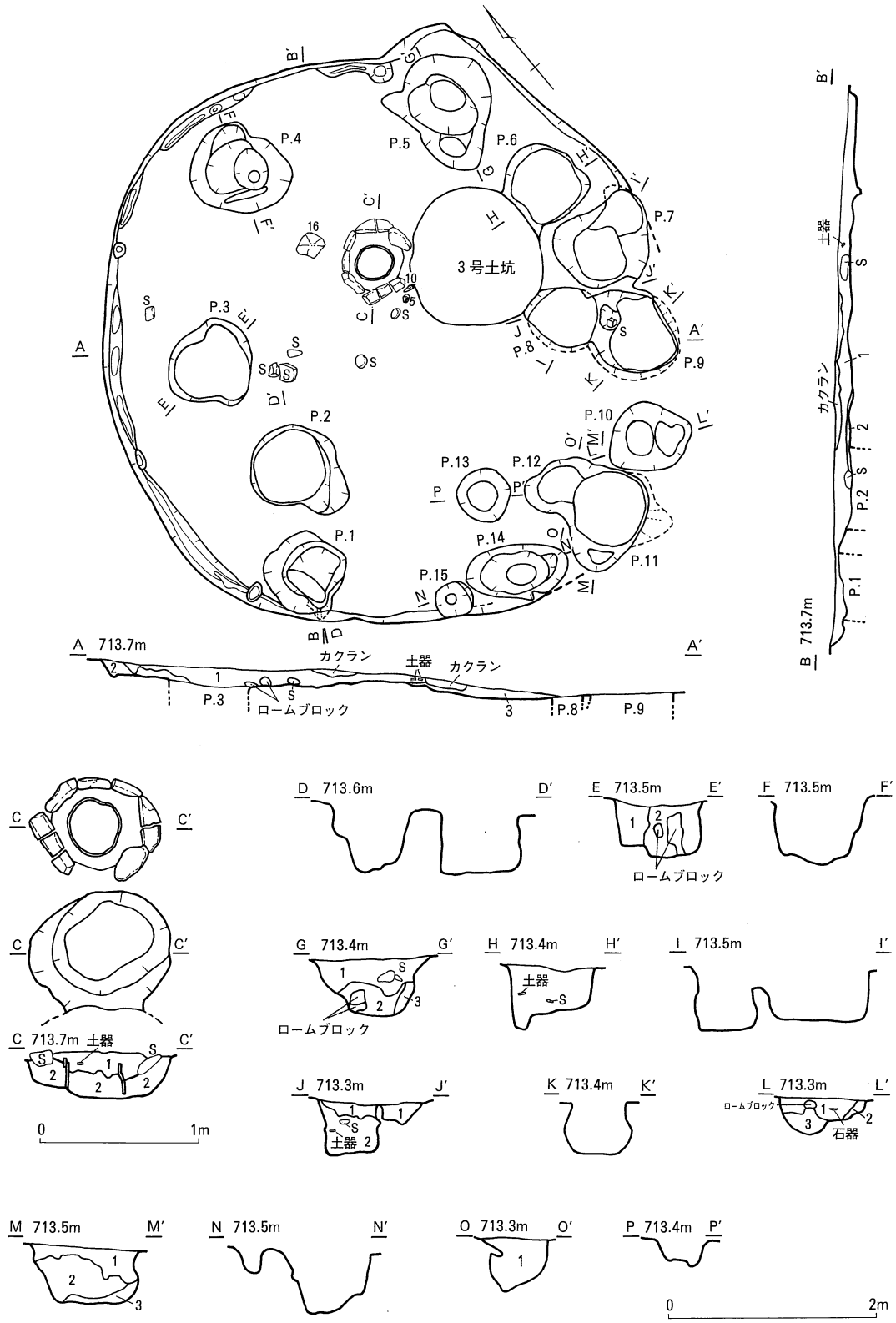
遺構（第10図）　調査区の北西部、Ｋ－６・７グリッドに位置する。検出した住居址の南東部は、既に削平されているため壁の立ち上がりが確認できなかった。プラン全体の形状及び大きさは、5.7×5.5ｍで円形を呈するプランである。主軸は、炉の位置と柱穴の関係から、Ｎ－35°－Ｅを示す。壁高は、最も残りの良い西側で15㎝を測る。周溝は、西側壁下に掘り凹められ、半周するのみである。床の状態は、全体的に堅く叩き締められていたが、炉の周辺部が最も顕著であった。ただ、幾つかの土坑に切られているため床の確認できない箇所もあった。

覆土は、２分層できた。１層は、暗オリーブ褐色土（2.5YR3／3）で、土器片をわずかに含む。２層は、ローム粒子を10％以下含む褐色土（10YR4／4）。

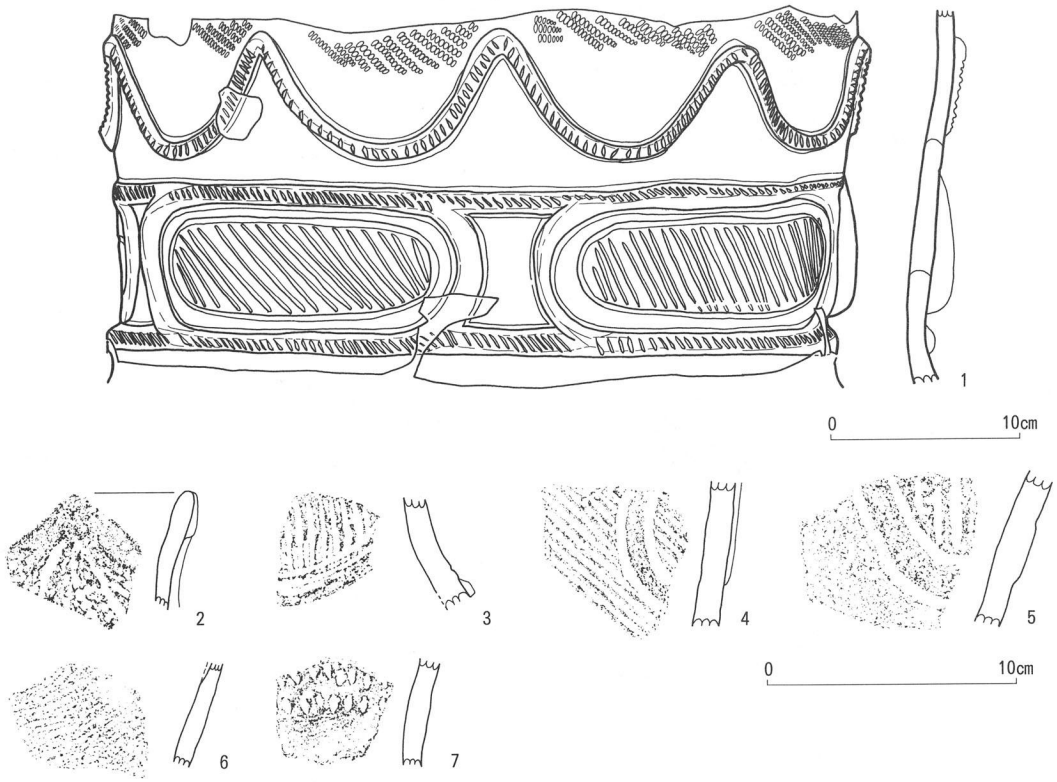
ピットは16穴を検出し、そのうち形状・規模・深さ・断面にみられる掘り込み状況より、Ｐ１・３・４・６・９・12の６穴が柱穴と想定できたが、Ｐ４・９・12はいずれも土坑に切られている。法量は次のとおりである。Ｐ1－82×80×65㎝、Ｐ2－86×56×68㎝、Ｐ3－73×70×56㎝、Ｐ4－98×91×65㎝、Ｐ5－106×84×54㎝、Ｐ6－80×78×62㎝、Ｐ7－130×130×72㎝、Ｐ8－97×92×47㎝、Ｐ9－68×60×61㎝、Ｐ10－80×76×34㎝、Ｐ11－71×34×35㎝、Ｐ12－130×68×61㎝、Ｐ13－65×48×51㎝、Ｐ14－50×50×27㎝、Ｐ15－90×54×55㎝、Ｐ16－32×30×27㎝。

炉は、石囲みによる埋甕炉で、住居址の出入口に対しやや奥寄りに位置している。直径90㎝で深さ30㎝に掘り込んだ後、40～50㎝大の平坦な自然石を用いてそれを壁面にしている。そのほぼ中央に土器を埋めて埋甕炉としている。土器と石との間は、多いところで10㎝の距離がある。炉に使用されてる土器は、口縁部と胴下半部を欠いたものを用いている。埋土は２分層することができた。１層は炭化物を２％含む灰黄褐色土（10YR4／2）。２層は炭化物を２％含む灰黄褐色土（10YR4／2）。１・２層の差異は、締まりの違いによって判断した。焼土はほとんど検出されず炉としての使用頻度は低いと思われる。また、東側を３号土坑に切られている。

遺物（第11・12図）　土器（１～７）、石器（８～16）が出土している。土器は床直上ないし覆土中より、破片の状態で散在して出土した。１は炉に使用されていた大型の深鉢の胴部でで、上部は緩やかに膨らみ下部はくびれる。文様は、横位に波状の隆帯文を貼付し、連続する



第10図　24号住居址実測図

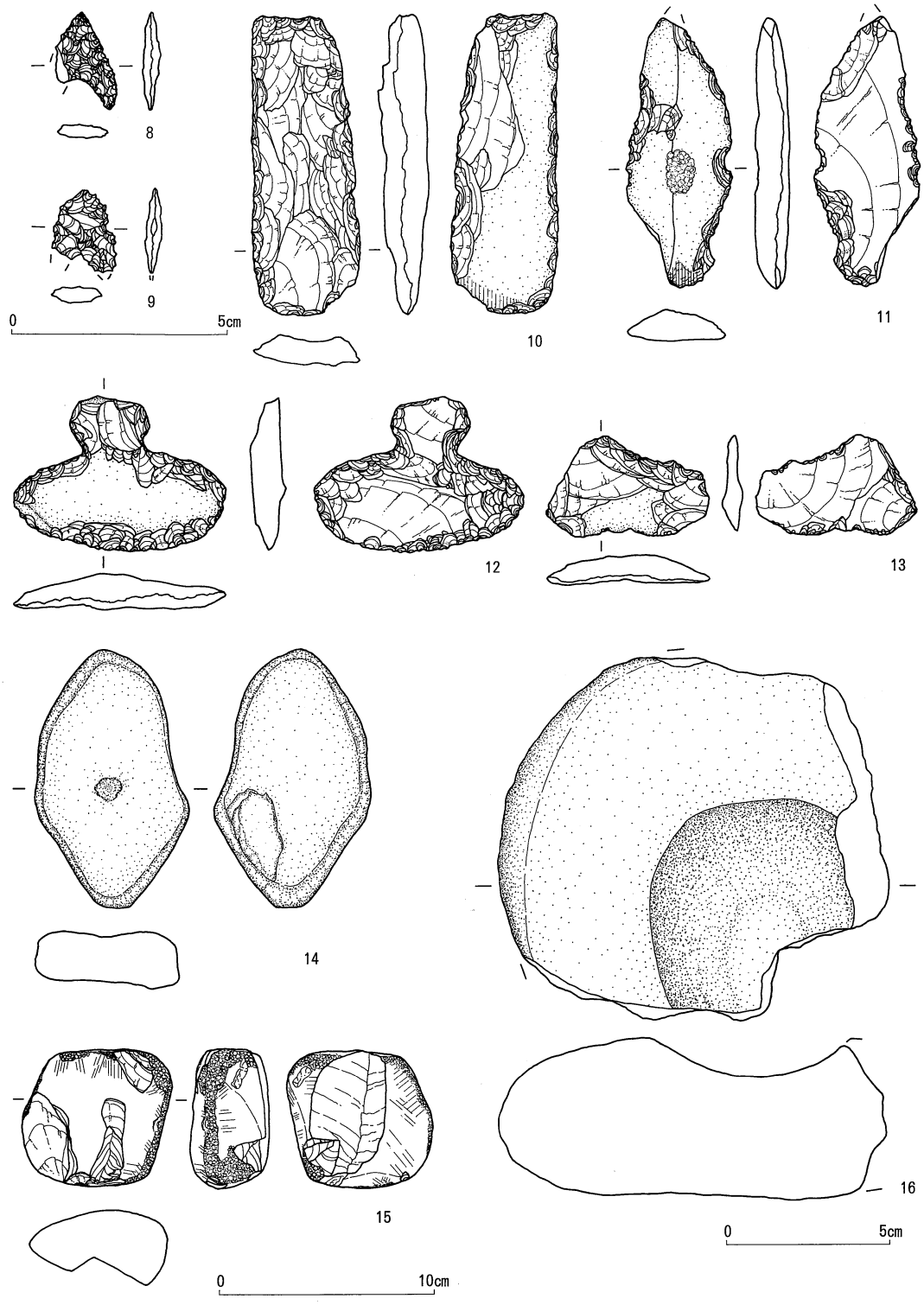


第11図　24号住居址出土土器実測図・土器拓影図

爪形文を施している。また、平行な２本の爪形隆帯文を横位に貼付し、その中を楕円横帯文で文様区画し、更に半截竹管状工具により斜位沈線を施している。器面上部には、ＬＲ縄文が施される。二次的な焼成痕はあまり見られない。２は波状口縁、３～５は櫛形文を施す。６はＬＲ縄文が、７は刻み目文がそれぞれ施される。

石器は、石鏃（８・９）、打製石斧（10・11）、石匙（12）、横刃型石器（13）、凹石（14）、磨・敲石（15）、石皿（16）が出土している。

本住居址は、出土土器の特徴から縄文時代中期中葉に位置づけられよう。



第12図　24号住居址出土石器実測図

第4表　24号住居址出土石器観察表

（法量欄：上段＝長さ、中段＝最大幅、下段＝厚さ）

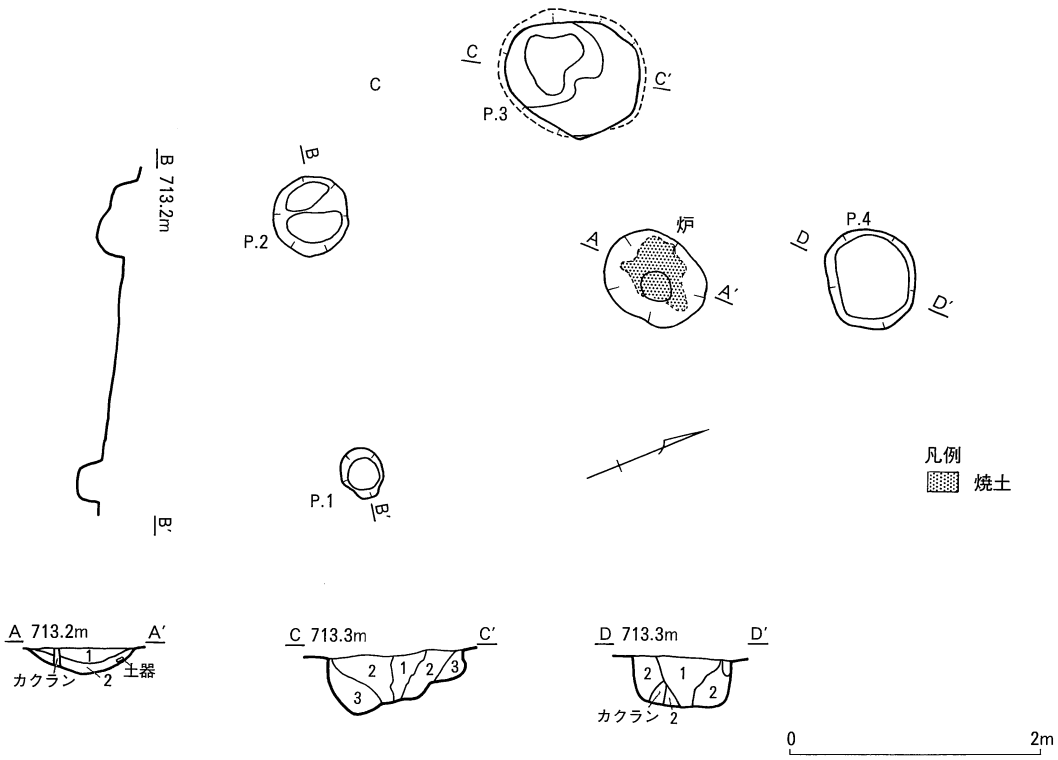
番号	分　類	石質	法量	重さ	諸　特　徴	備　考
			(cm)	(g)		
8	石　鏃	黒曜石	2.6 (1.3) 0.4	(0.6)	・凹基無茎石鏃。 両面調整による、丁寧な作出がなされ断面はレンズ状を呈する。	片脚部欠損
9	石　鏃	黒曜石	(1.9) 1.4 0.4	(0.7)	・凹基無茎石鏃。 ・断面はレンズ状を呈している。	両脚部欠損
10	打製石斧	礫　岩	13.9 5.0 2.3	112.0	・短冊型に属し、裏面に自然面を有する。 ・基部を刃部とし、使用による磨痕、及び剥離（使用痕）が認められる。片側縁部は細い打撃により、丁寧に調整されている。	
11	打製石斧	頁　岩	(12.5) 4.6 1.6	(90.0)	・表面は自然面で、そのほぼ中央に、敲打による凹痕を有し、刃部に磨痕が認められる。基部、頂部、両側縁部、全て刃部として使用可能と思われる。	上部先端欠損
12	石　匙	泥　岩	7.1 9.7 1.5	93.0	・横型で表面は自然面を有する。つまみはほぼ中央につき、刃部はやや幅広で、先端は丸みを帯びている。細い調整によりきれいに作出されている。	
13	横刃型石器	頁　岩	4.4 7.4 0.9	33.0	・片面に自然面を残す剥片を用い、その側縁部を刃部として使用している。	
14	凹　石	砂　岩	12.0 7.0 2.6	293.0	・表面のほぼ中央に浅い凹痕を有する。	
15	磨石･敲石	緑泥岩	6.3 6.3 3.6	235.0	・周縁に敲打痕を有する。 ・両面に磨痕が認められる。	
16	石　皿	巨　晶 花崗岩	(22.2) (23.8) 9.5	7500.0	・表面が風化しているので難しいと思われる。	ほぼ3／4欠損

4，25号住居址

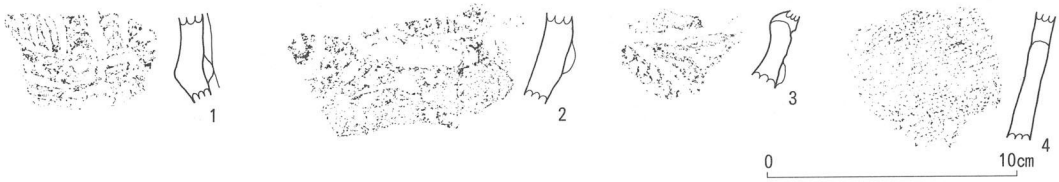
遺構（第13図）　調査区の南東部、K－9・10グリッドに位置する。既に住居址の床面まで削平されており、破壊の状況が著しく、また東側は調査区外に埋没しているためプラン全体の形状及び規模は確認できなかった。堅い床面の範囲もなく、かろうじて炉と柱穴（P1～P4）の下部が検出できた。

ピットは、4穴検出された。炉の位置とピットの形状・規模・断面にみられる掘り込み状況からみて4穴全てが柱穴と思われる。ピットの法量は次のとおりである。P1－40×35×20cm、P2－65×60×25cm、P3－110×90×45cm、P4－80×70×40cm。また、P3・4の埋土は分層が可能で、P3が3分層、P4が2分層できた。P3の1層は炭化物を3％含む暗褐色土（10YR3／3）。2層は炭化物を2％含む暗褐色土（10YR3／4）。3層は炭化物を1％含む黒褐色土（10YR3／2）。P4の1層は、ローム粒子を3％含む暗褐色土（10YR3／4）。2層はロームブロックを含む暗褐色土（10YR3／3）。

炉は、およらく住居址の出入口に対して、やや奥まった所にあったと思われる。また、炉の下部には、火焼状況を示す焼土が1～2cmの厚さで残存していた。炉の埋土は、2分層することができた。1層は炭化物・ローム粒子を2％含む暗褐色土（10YR3／4）。2層は炭化物



第13図　25号住居址実測図



第14図　25号住居址出土土器拓影図

・ローム粒子をわずかに含む黒褐色土（10YR2／2）。

遺物（第14図）　土器（１～４）が出土している。何れも破片で１～３が炉内から、４がＰ３内からの出土であった。１～３は、刻み隆帯での区画文と沈線を施し、おそらく同一の土器と思われる。胎土は脆い。４は、ＬＲ縄文を横位に施してある。

尚、本住居址の時期は、縄文時代中期中葉に位置づけられよう。

第2節　土　坑

1，1号土坑（第15図）

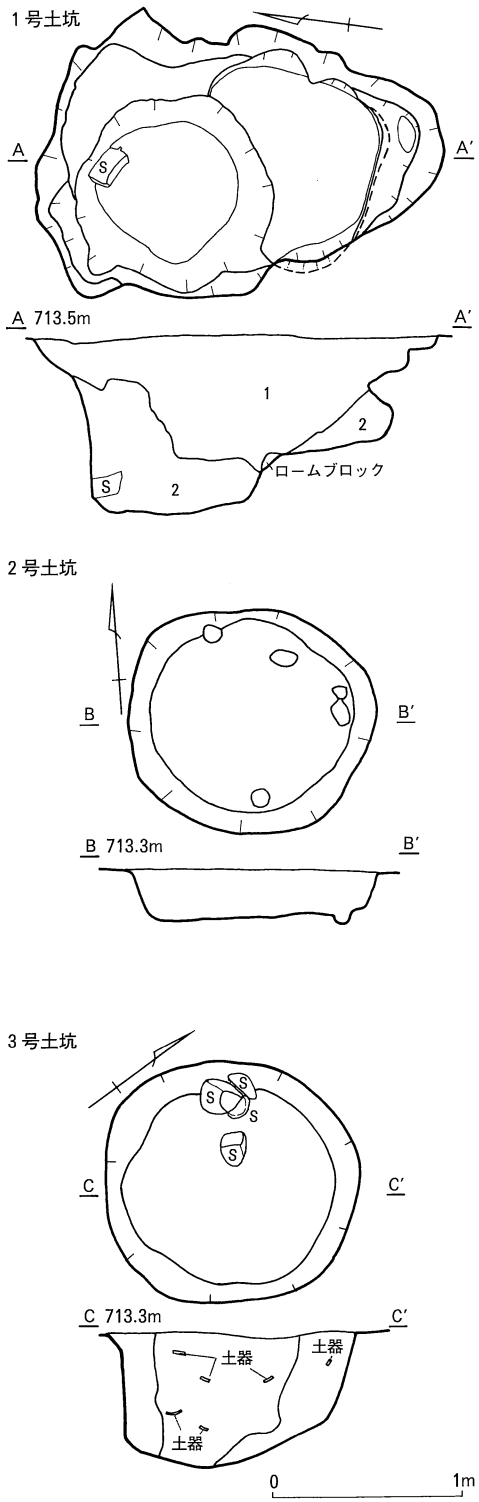
調査区の北西部、Ｌ－５グリッドに位置する。大きさは2.16m×1.45mの楕円形プランを呈し、深さは96cmを測る大型の土坑である。断面は、不整の台形。覆土は２分層された。１層は、炭化物・ローム粒子を２％ほど含む暗褐色土（10YR3／3)。２層は、ローム粒子を50%、炭化物を１％含む褐色土（10YR4／4)。また、底上10cmの所に17cm大の角石の転入がみられた。

2，2号土坑（第15図）

調査区の西側、Ｋ－７・８、Ｌ－７・８グリッドに位置する。1.33×1.20mの円形プランを呈する。掘削以前に土坑上部を削平されているため、深さは25cmと浅い。断面は、四角形。覆土は単一 層で、炭化物を３％含む黒褐色土（7.5YR2／2)。下部に焼土をわずかに含む。遺物は石鏃が２点出土している（第16図－３・４)。この事より、この土坑の時代は、縄文時代と思われる。

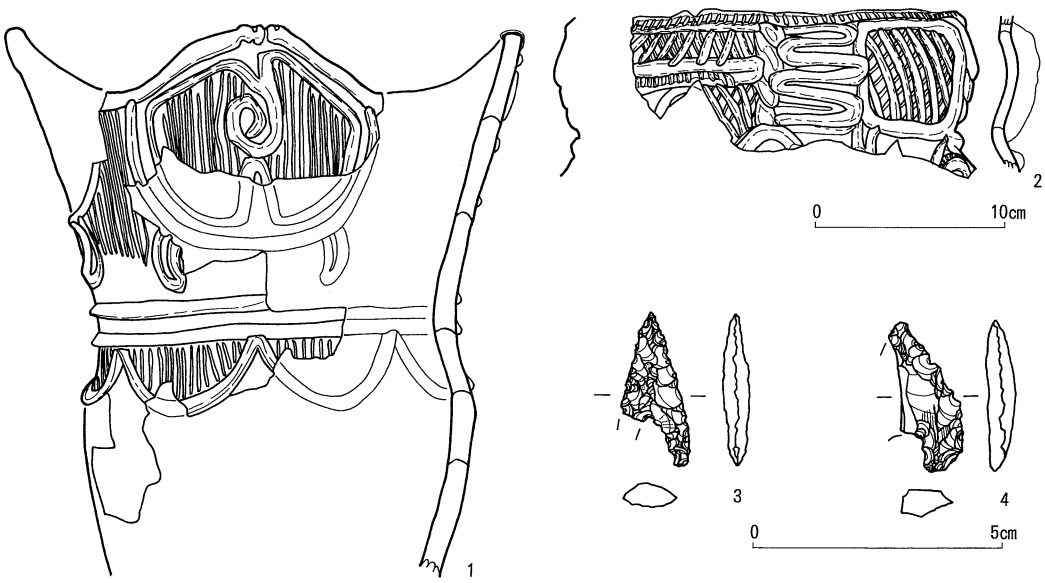
3，3号土坑（第15図）

調査区の北側、Ｋ－６グリッドに位置する。24号住居址を切っている。1.39×1.34mの円形プランを呈し、深さは71cmを測る。断面は、台形。覆土は２分層できた。１層は、ローム粒子・炭化物を１％弱含む暗褐色土（7.5YR3／3)。２層は、炭火物を１％弱含む暗褐色土（10YR3／4)。２層とも、土器片をわずかに含んでいる。また、西側は24号住居址の炉を切っているため、土坑内に炉石の一部が転入していた。



第15図　土坑実測図

遺物（第16図）は覆土中に散在して出土した。1は4単位からなる波状口縁で、頸部からラッパ状に外開する。胴部は緩やかに膨らむ。底部は欠損して無い。文様は、胴部に連続する櫛形文を施している。2は、胴部の破片で隆線を波状・斜位に貼付している。本土坑の時期は、出土土器の形式より縄文時代中期後葉の、それも初段階に位置することができよう。



第16図　土坑出土土器・石器実測図

第5表　2号土坑出土石器観察表

（法量欄：上段＝長さ、中段＝最大幅、下段＝厚さ）

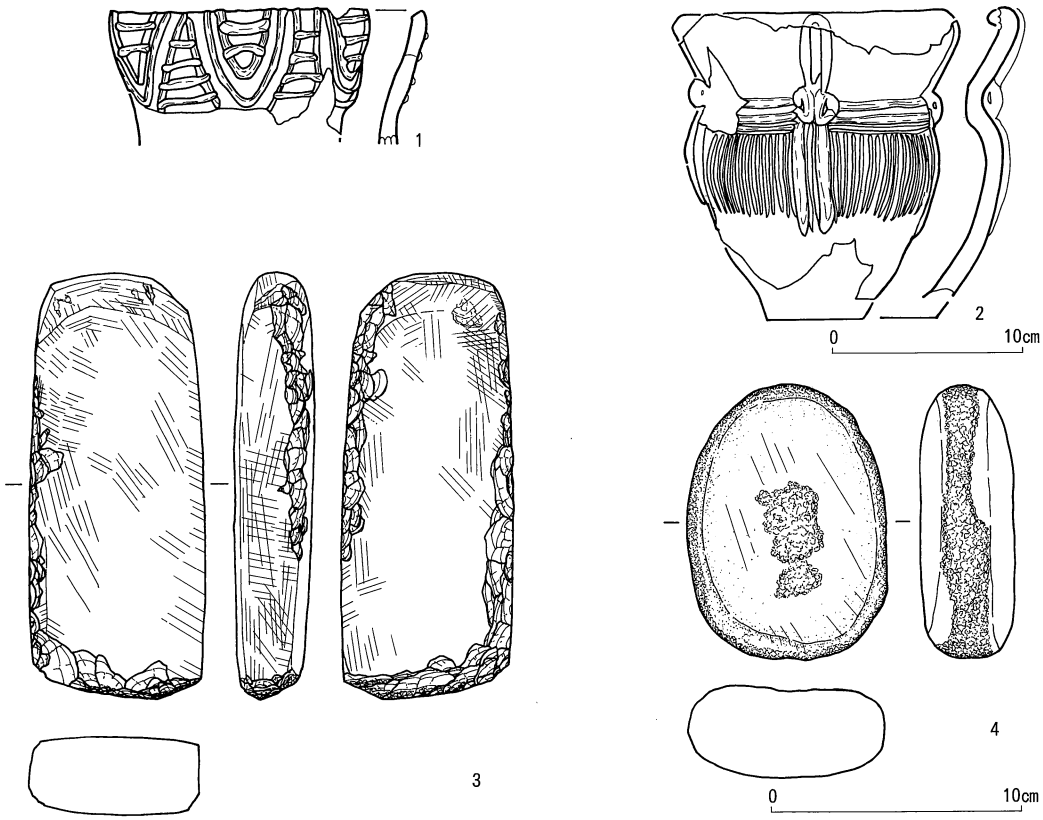
番号	分　類	石質	法量	重さ	諸　特　徴	備　考
3	石　鏃	黒曜石	(cm) 3.1 1.3 0.5	(g) 1.0	・両面調整による、丁寧な作出がなされ断面はレンズ状を呈する。 ・自然面を残す。	片脚部欠損
4	石　鏃	黒曜石	3.0 (1.3) 0.6	1.5	・凹基無茎石鏃。 ・未調整部分を残す。	1／2欠損

第３節　遺構外出土遺物

遺構上面確認において出土したり、調査前に表面採集された土器・石器を図化した。

１，土　器（第17図）

１は、小型の深鉢の口縁部で、キャリパー型を呈する。頸部に抉りを持つと思われる。文様は、隆線で連続する重弧文と交差する貼付文を基本としている。２は、ほぼ完全な形の小型の深鉢で、おそらく何かの遺構と関係があると思われる。口縁部は、「く」の字状に曲がるキャリパー型を呈し、胴中位でくびれ、胴部は球状に膨らむ。頸部に平行する横位隆帯文を施し、４単位からなる突起と縦位の隆帯文で文様区画し、その中を半截竹管状工具で縦位に、平行沈線を施している。口縁部及び胴下半部は無文。土器１・２は、何れも本調査で検出された住居址から出土している土器と形式・文様の点で、１号住居址出土土器と類似するものであり、縄文時代中期後葉の初段階に位置づけられることができよう。



第17図　遺構外出土土器・石器実測図

2，石　器（第17図）

石器は2点が採集された。1は定角式の大型磨製石斧で、2は磨・敲・凹石である。

第6表　遺構外出土石器観察表

（法量欄：上段＝長さ、中段＝最大幅、下段＝厚さ）

番号	分　類	石質	法量	重さ	諸　特　徴	備　考
			(cm)	(g)		
3	磨製石斧	チャート	17.1 1.3 0.5	770.0	・定角式の大型品で、表面は丁寧に研磨されている。 ・刃部に敲打による、摩滅、後退が見られる。	
4	磨石・敲石 凹　石	花崗岩	11.0 8.0 3.7	530.0	・両面に磨痕・凹痕が、側縁部には敲打痕が認められる。	

第Ⅴ章　まとめ

丸山遺跡における緊急発掘調査は、町土地開発公社による墓地造成工事に伴うもので、今回で第３次となり、遺跡包蔵地の東側限界域まで調査が及んだと言える。また今年度は、本調査地に隣接する、国道153線・箕輪バイパス建設工事に係る同遺跡の第２次調査も一部並行して実施された。

町教育委員会は同開発事業に伴い、昭和55年度から58年度にかけて、町南部に所在する箕輪遺跡の発掘調査を、そして平成元年度には丸山遺跡の第１次調査と熊野上遺跡（古城遺跡）について実施し、多大な成果を収めてきた。特に丸山遺跡の第１次調査では、1,880㎡の調査範囲より、縄文時代中期初頭から後葉、奈良・平安時代の竪穴式住居址17軒を検出した。中でも中・後葉の住居址からは豊富な遺物を伴出している。調査期間中は、町内外から多くの見学者が訪れ、ほぼ原形に近い形で出土した顔面把手付土器（第８号住居址）に大きな注目を集めた。

今回の調査地は、遺跡包蔵地の東側限界域に位置し、段丘の末端部にあたる箇所から住居址等の遺構が検出している。住居址は、２次調査で新たに検出した２軒の住居址と合わせた５軒すべてが縄文時代中期中葉期に比定できよう。また、第１次調査で検出した同時期の３軒（６・８・13号）と共に、調査区の東端部に集中し居住域を形成している。一方、中期後葉期の10軒（１・３～５・10・12・14・18～20）は、それと隣接するが、やや西域に広がりを見せ、更に調査区の西側へと続いていると思われる。しかし、遺跡の南側傾斜面地においては、既に構造改善によって地形が変えられ、包蔵地の大半が消滅してしまっているため、各時期の細分による集落構成の様子がはっきりとつかめないのが残念である。

末筆となりましたが、調査の進行及び本報告書作成にあたり、数々のご指導並びにご協力をいただきました各関係機関及び各個人の方々、また調査に携わっていただいた団員の皆様方に、この報告書の刊行を持ちまして厚く御礼申し上げます。

参考・引用文献　（著者名50音順）

安孫子昭二	1988	「勝坂式系土器様式」　縄文土器大観　第２巻　中期Ⅰ
植田　真	1986	「組成論　勝坂式土器」　季刊考古学17　雄山閣
岡谷市教育委員会	1986	「梨久保遺跡」
神村　透	1986	「下伊那型櫛形文土器」　長野県考古学会誌51
末木　建	1988	「曾利式土器様式」　縄文土器大観　第３巻　中期Ⅱ
長野県史刊行会	1981	長野県史　考古資料編　全１巻（１）　遺跡地名表
長野県史刊行会	1985	長野県史　考古資料編　全１巻（２）　中・南信版
長野県史刊行会	1988	長野県史　考古資料編　全１巻（３）　遺構・遺物
藤森栄一他	1965	「井戸尻」　中央公論美術出版
三上徹也	1986	「中部・西関東地方における縄文時代中期中葉土器の変遷と後葉土器への移行」　長野県考古学会誌51
三上徹也	1988	「唐草文系土器様式」　縄文土器大観　第３巻　中期Ⅱ
箕輪町誌編纂刊行委員会	1976	箕輪町誌　第１巻　自然・現代編
箕輪町誌編纂刊行委員会	1986	箕輪町誌　第２巻　歴史編
箕輪町教育委員会	1980	「箕輪遺跡　第１集」
箕輪町教育委員会	1981	「箕輪遺跡　第２集」
箕輪町教育委員会	1982	「箕輪遺跡　第３集」
箕輪町教育委員会	1983	「箕輪遺跡　第４集」
箕輪町教育委員会	1980	「丸山遺跡」
箕輪町教育委員会	1980	「熊の上遺跡」
箕輪町教育委員会	1994	「丸山遺跡　第２次」

図　　版

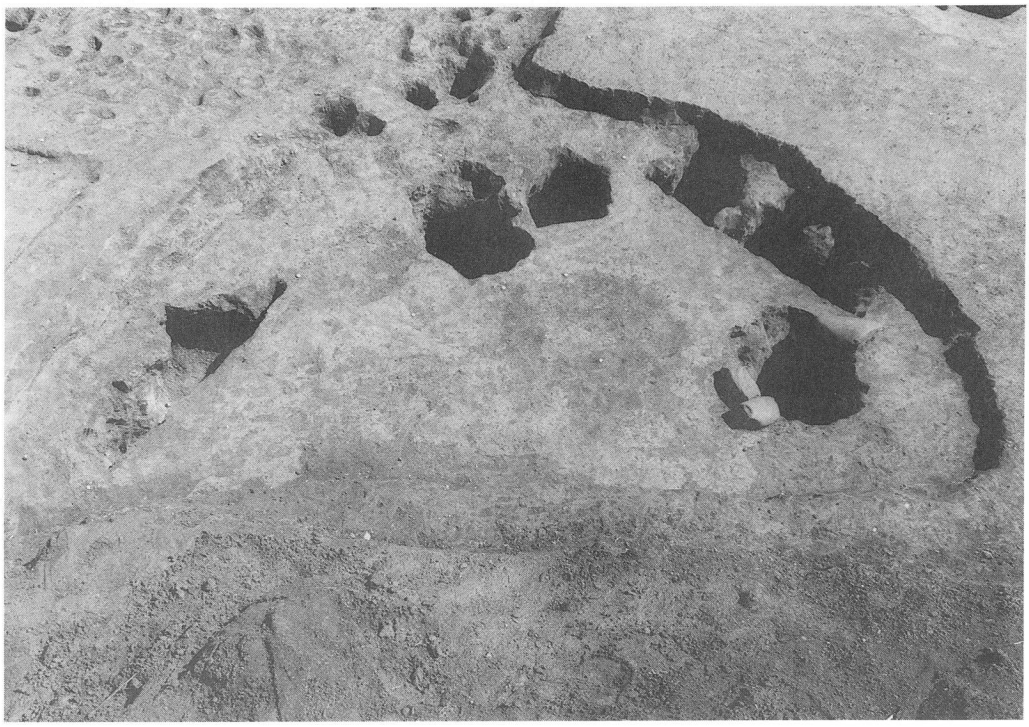
遺跡地遠景（東方より）

調査地近景（南西より）

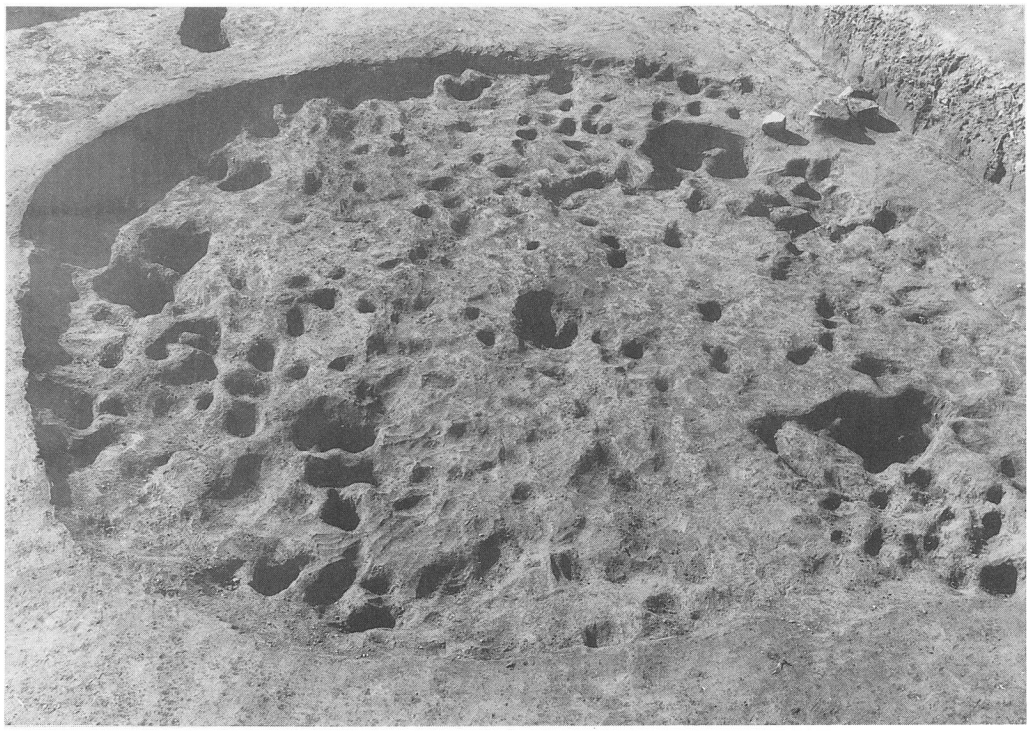
図版2

調査地全景

土層断面



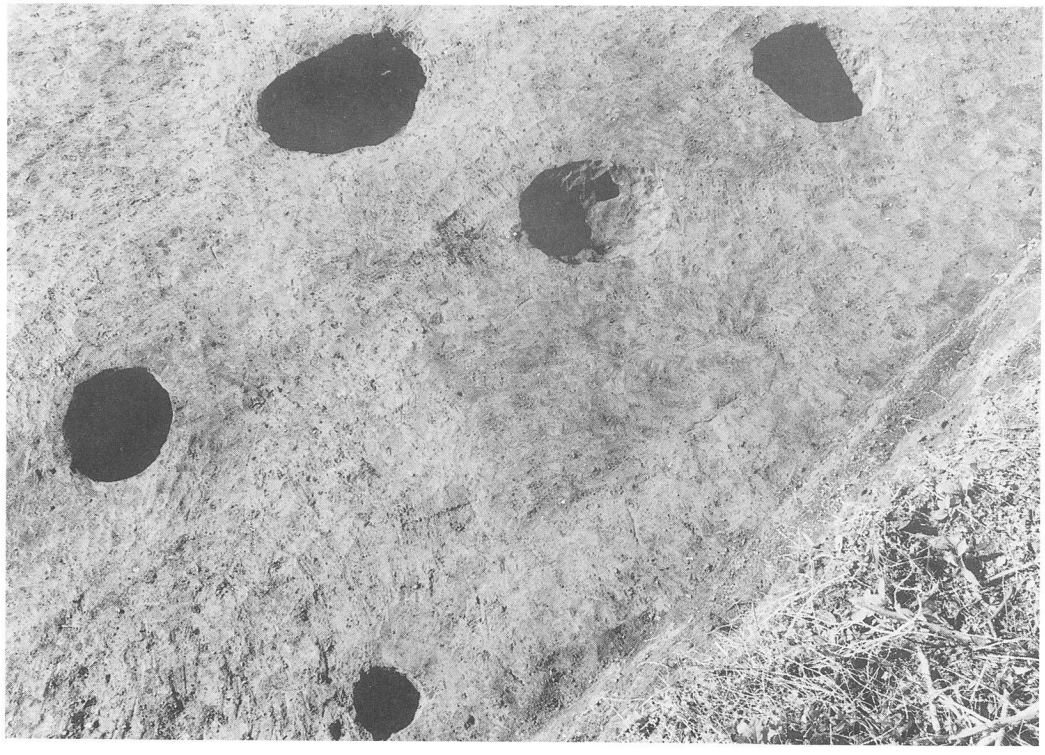
8号住居址



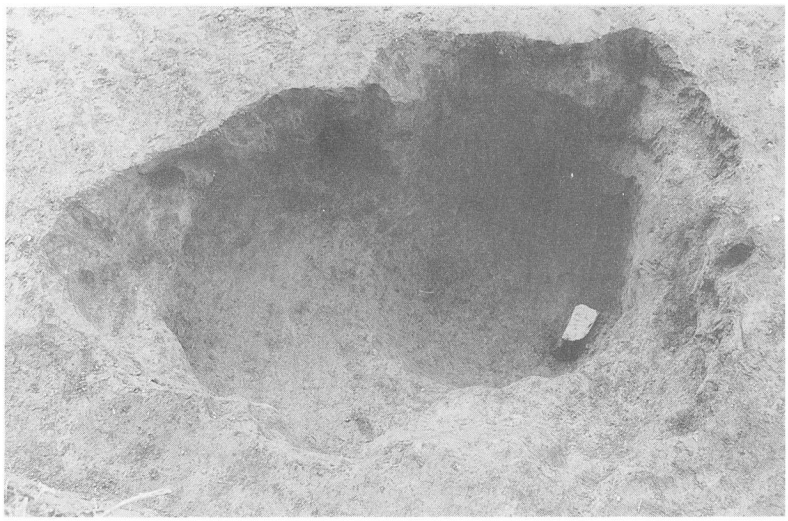
23号住居址

図版4

24号住居址



25号住居址

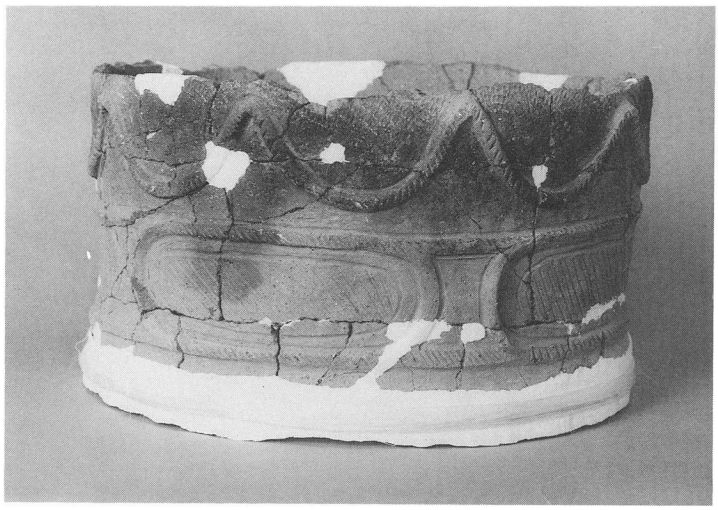


1号土坑

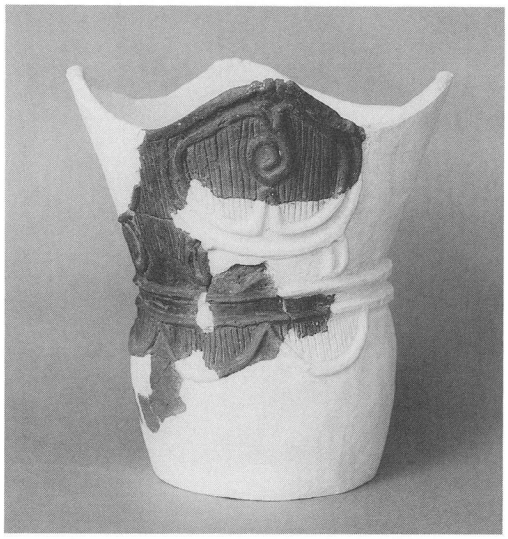
2号土坑

3号土坑

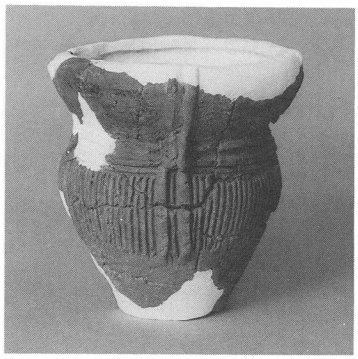
図版6



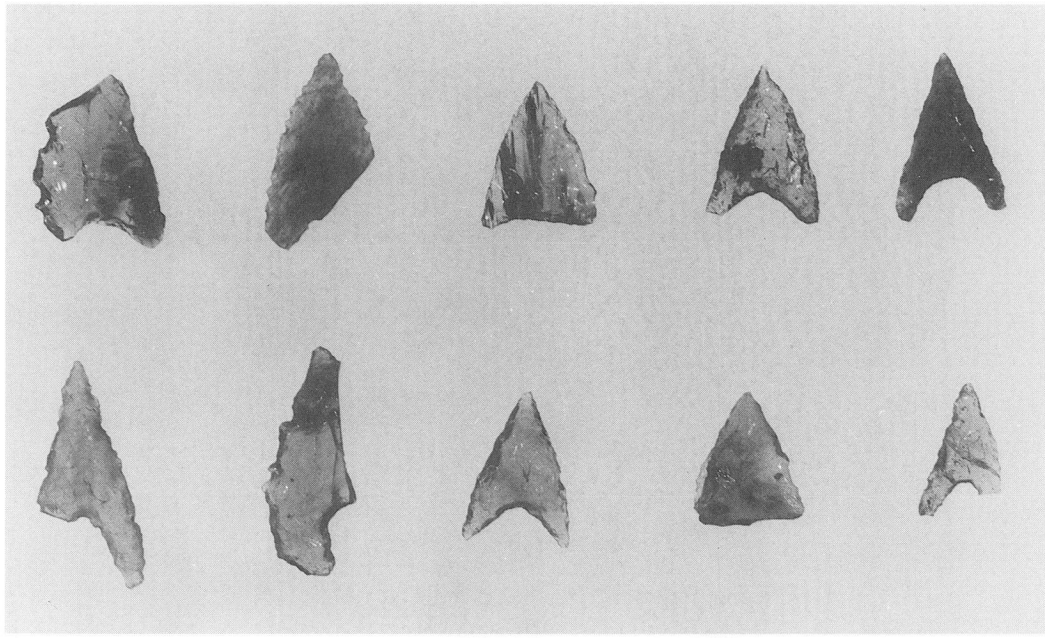
24号住居址出土土器



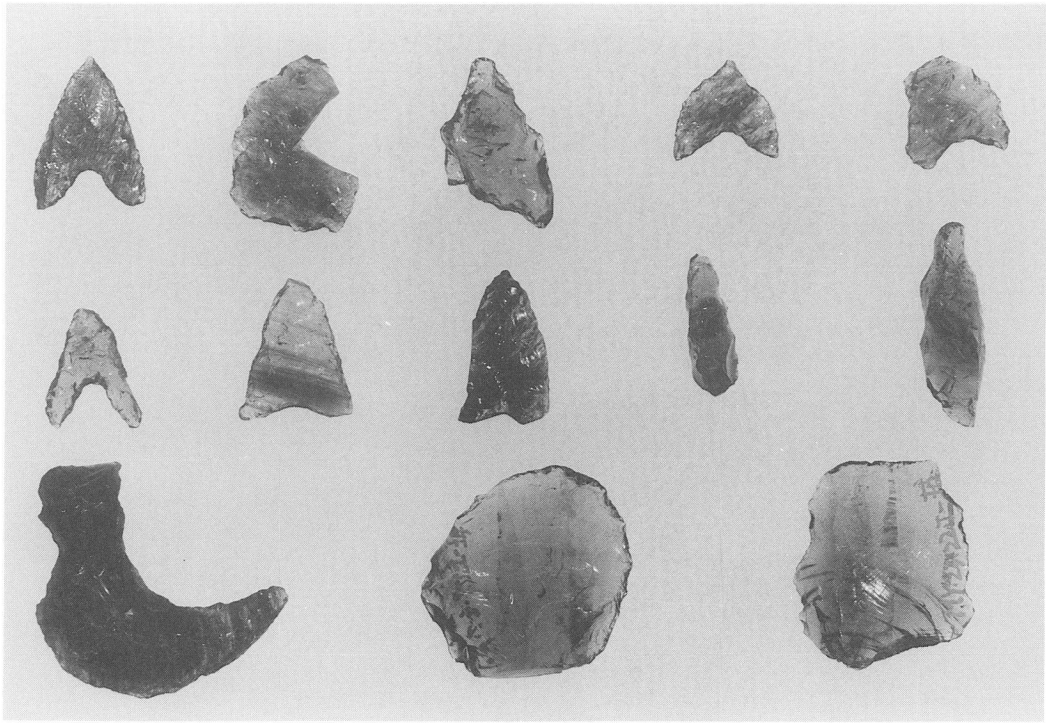
3号土坑出土土器



遺構外出土土器

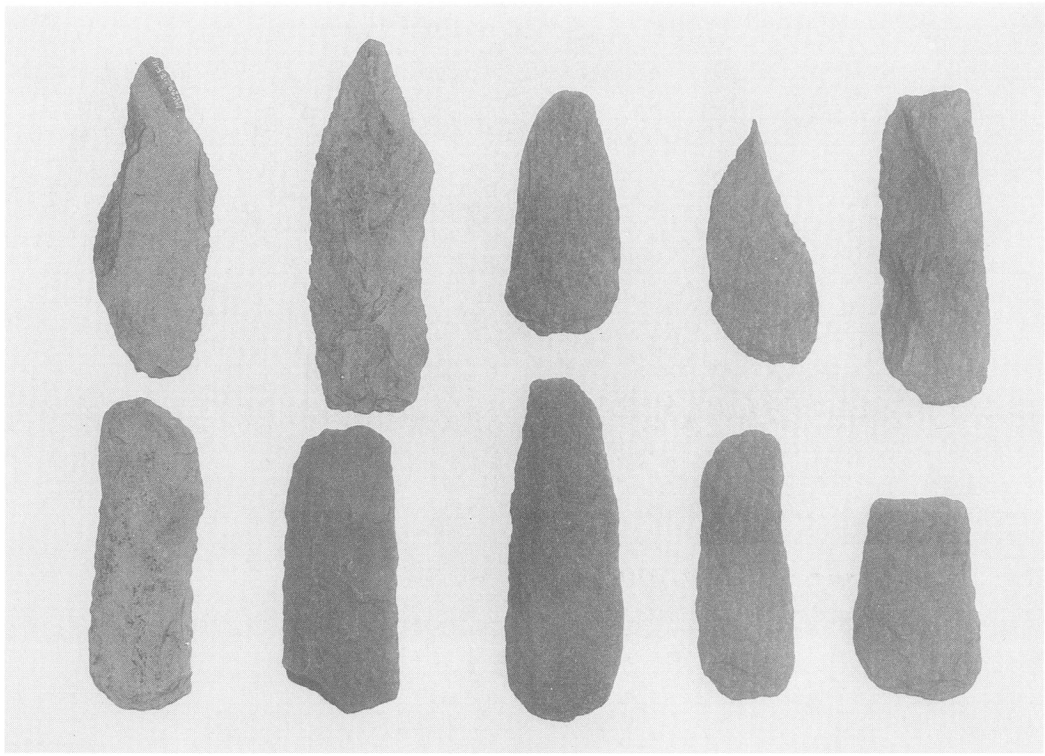


出土石器 1

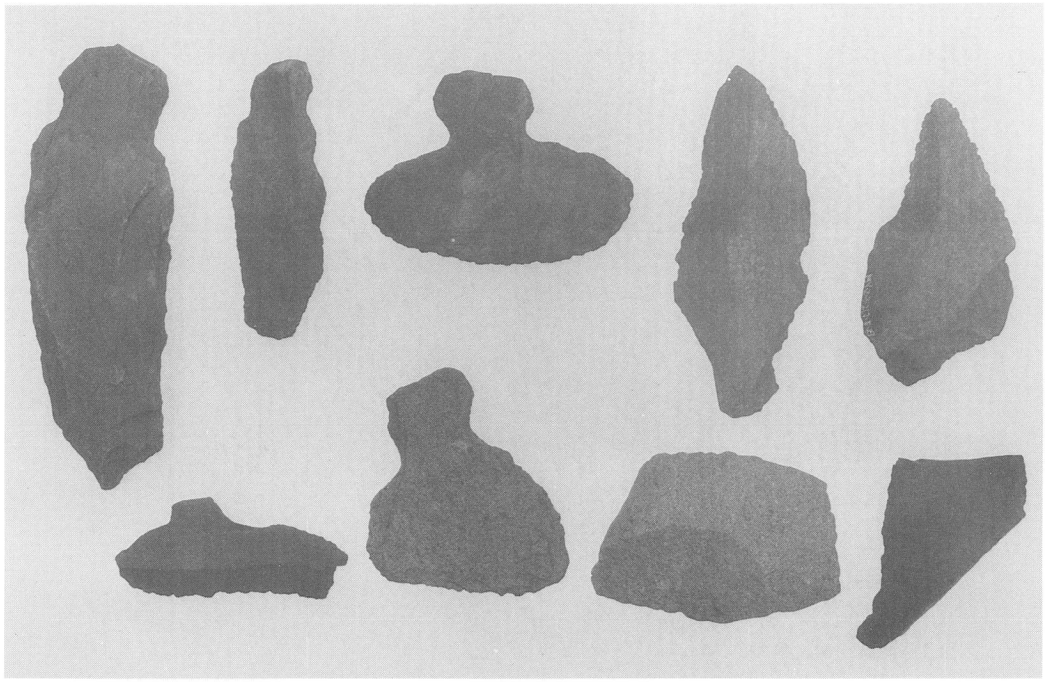


出土石器 2

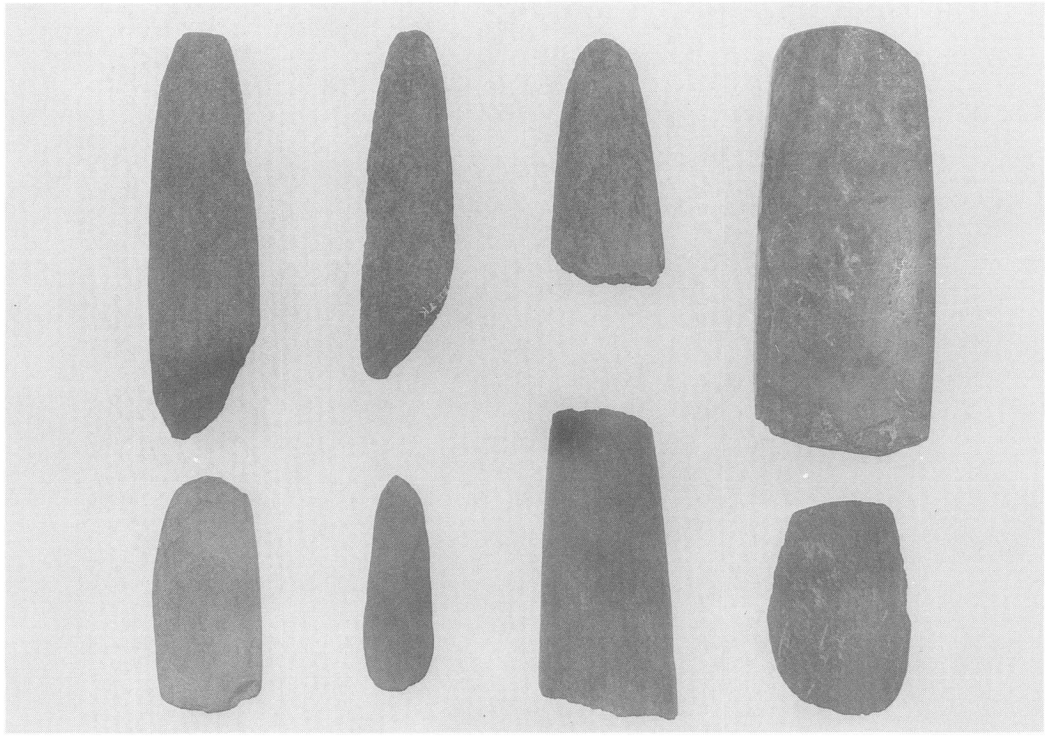
図版8



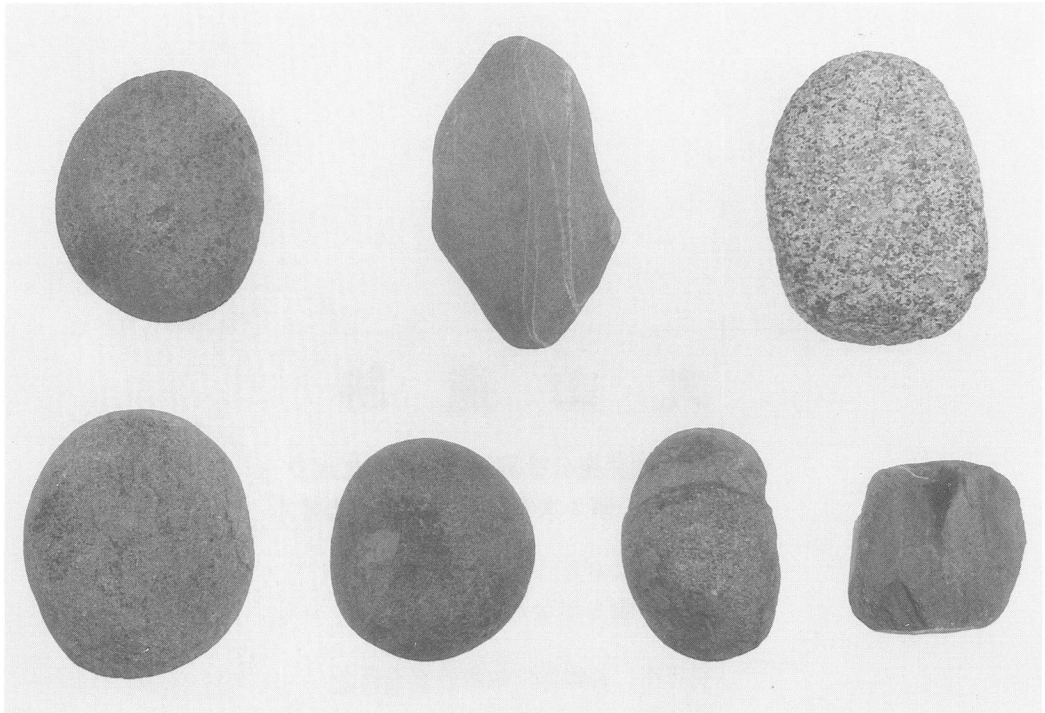
出土石器 3



出土石器 4



出土石器 5



出土石器 6

丸　山　遺　跡

箕輪町土地開発公社墓地造成工事に伴う
丸山遺跡の第３次緊急発掘調査報告書

平成６年３月30日　印刷
平成６年３月30日　発行

発行所　長野県箕輪町教育委員会
印刷所　㈲　富　士　印　刷